

R&V

14号

1994年
夏号7月～9月



Ichio d'Amico

R & V

14号



五十沢本流を行く（上カケズ沢出合上）

94' 夏 ACC-J 茨城

筋力トレーニング

先日、高須と船橋ロッキーに行った。いまさらスポーツクライミングという年でもないのだが、雨で山行が流れたので行ってみた。そこでは若者がたくさんトレーニングに汗を流していた。トレーニングボードのほとんどはオーバーハングになっているので、初めは申し訳程度にある垂壁からトレーニングを開始した。最初の2～3本はトップロープで、あとはリード形式で登った。5.9までは登れるのだが5.10になると登れない。見ていると屋根のように張り出したハングを登る女性もいる。40人位の人がいたが、初心者を除いて、私より下手な人はいないのではないかと思われた。登り方はだいたいわかるのだが、パワーがない。特にパワー不足を感じたのが握力であった。トレーニングを重ねている人達はバンプしても、少し休むと回復するようだが私は回復しないのだ。これは年のせいばかりではなく、トレーニング不足のせいだ。都会には平日でも、雨が降っても夜まで練習できるジムが、あちこちにあっとうらやましい。それに比べ私の住んでる所なんぞ何もない。よく都会の人は、自然が豊かで、空気も旨くて良い所だなどと言うが、それは裏返せば山と畑と田圃以外何も無いことなのだ。ところがである。クライミングジムはないけれど筋力トレーニングができる所があったのだ。農業者トレーニングセンターといって町の体育館の中にあり、別に農業者じゃなくてもタダで利用できるのだ。それも夜の10時まで。とても毎日に行けないので週に1～2度といったところか。いつも1時間位なのでそれほど期待はできないと思うが、やらないよりはましだろう。一人で行くのもつまらないので、子供を誘うと、だれかは付き合ってくれる。私は子供が3人いるが、みんな私より体が大きく、どんなトレーニングマシンでも私は負けてしまう。親バカとはよくいったもので、自分が負けることは悔しくも思うが、それ以上嬉しいものなのだ。特に逆立ちをして何十mも歩くなど、自分にできないことを目の前で見せられると、うちの子供達もずいぶん大きくなったんだな、と嬉しくなるのである。丹沢や奥多摩の沢に連れて行った頃を思うと、自分が山登りにホウけているうち、いつの間にか子供達は大きくなったのだ。最近スキーにたまに連れて行くくらいで、部活とか何とかで一緒に沢に行くことはない。私みたいな不良親父でも子供は育っていくようだ。さて自分の筋力とはいうと、持久力はまだいいとしても、瞬発力はかなり衰えていることがわかる。それに体がかたくなったので、まずストレッチングから始まり、主に登攀に関係する筋を鍛えるようにしている。いろいろなマシン（機械名がわからない）を使ってトレーニングしていく。“ああ、これは氷壁登攀のためのアキレス腱を鍛えているんだ”とか、これはスキーのウェデルンの練習だなどと頭の中でいろいろイメージしてやるのである。ここに来ている人達は、みんな何かの目的を持って来ている。ある

人は筋骨隆々とした体を作りたくて、又ある人はゴルフのためのウェイトトレーニングに。目的のない人は2～3回で来なくなってしまうようだ。1時間もやると結構疲れる。このあとはサウナといきたいところだが、悲しいかなサウナはない。最もタダでサウナまで望むのも図々しいというもの、しかたあるまい。

話変わるけど、私はサウナも大好き人間で週1度以上は行く。ほとんど平日の夜だが、いつ行っても顔をあわせる人が何人もいる。なんでも毎日来るとのこと。サウナに入らないと一日が終わらないのだそうだ。そういう人間が数多くいる。ここに来ている人達もまた何かの目的を持っている。一番多いのが減量だ。ただし、サウナだけでは減量はできない、というのが皆さんの結論ではある。私の目的はストレス解消というところだ。とてもゆっくりした気分になれてスッキリする。けして減量が目的ではないが、だいたい2キロは減る。でも当然水を飲めば元にもどる。私もこの後ビールを飲むので、けして減量にはならない。この旨いビールが飲みたくてサウナに行く、と言っても過言ではないだろう。サウナなら毎日行ってもいいが、それは経済的に許されないのが現状である。

筋力トレーニングだが、まだ始めたばかりなので、どの位続くか自分でもわからないが、当面の目標は北岳冬山合宿までだ。そして、あわよくばバットレス登攀隊に入り、4尾根でも登ってしまおうなんて魂胆もあるのである。その目標がクリヤーできたら春山合宿までだ。それをクリヤーしたらヒマラヤ遠征（実現できるか甚だ疑問の点も多いが）までだ。そしていつの日か5、10dをリードしたいと思っている。でも私はそれ以上は望まない。だって私の趣味はフリークライミングではなく、山登りであるからだ。さて、筋力トレーニングの成果はいかに、乞うご期待！！

(本図一統)



《目次》

1994年 14号 7月～9月第14号 ACC-J 茨城

筋力トレーニング	・・・	1
集会報告	・・・	4
山行報告	・・・	5
谷川岳・東尾根	・・・	6
待ちに待った南稜	・・・	7
丹波川・小常木谷	・・・	9
谷川岳・幽の沢左俣中央ルンゼ	・・・	11
念願の谷川岳・一の倉南稜	・・・	14
白水沢・左俣	・・・	16
五十沢中部下部ゴルジュ突破	・・・	18
【コラム・M氏の災難】	・・・	22
奥多摩・日原川－鷹ノ巣谷	・・・	23
1994夏合宿劔岳チンネ（中央チムニー～aバンド～bクラック）	・・・	25
夏合宿岳チンネ（中央チムニー～aバンド～bクラック）	・・・	29
チンネー北条・新村ルート	・・・	30
源次郎尾根	・・・	32
劔尾根	・・・	35
劔岳・ハツ峰縦走	・・・	39
【…なにの話…】	・・・	40
屏風岩・東稜ルート	・・・	42
屏風岩・雲稜ルート	・・・	44
劔岳周遊山行	・・・	47
五十沢川本流遡行（上部永松沢）	・・・	53
【コラム・五十沢であった事】	・・・	62
谷川岳・幽の沢V字状岩壁右ルート	・・・	63
唐沢岳幕岩山嶺第1ルート	・・・	64
友好山岳団体の月報・会報紹介	・・・	66
編集後記	・・・	68

表紙絵…ポカラからのマチャブチャリ…

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

【7月】

7月 6日

出席者 本図、村上、馬淵、古山、鈴木、高田、澤田、今井、菊地、告、
鯉河

7月20日

出席者 本図、古山、生井、笹沢、高田、佐藤、鯉河、村上、告、澤田、
菊地

7月27日 …臨時総会…

出席者 本図、木村、菊池、鯉河、中島、生井、高田、佐藤、長久保、中居
古山、馬淵、今井、長浜、広瀬、栗原 告、澤田、村上(囃)

【8月】

8月 3日

出席者 本図、長久保、馬淵、古山、鈴木、菊地、高田、告、佐藤、高須、
澤田、今井

8月17日

出席者 本図、古山、高田、高須、生井

8月31日

出席者 高田、高須、村上、村上(囃)、菊地、今井、澤田、告、生井、鯉河

【9月】

9月13日

出席者 本図、古山、高須、鈴木、今井、村上、生井、澤田、告、菊地

9月28日

出席者 本図、古山、高田、高須、村上、生井、菊地

山行報告

1994年 7月～9月

【7月】

- | | | |
|----------|---------------|-------------------------|
| 7月 3日 | 谷川岳東尾根 | L 本図、坂本、馬淵、澤田、
高田、今井 |
| 7月 3日 | 谷川岳一の倉沢南稜 | L 古山、佐藤 |
| 7月10日 | 丹波川・小常木谷 | L 本図、鯉河、古山、澤田、
告、馬淵 |
| 7月17日 | 谷川岳幽の沢左俣中央ルンゼ | L 高田、古山 |
| 7月17日 | 谷川岳一の倉沢南稜 | L 本図、笹沢 |
| 7月24日 | 那須・白水沢左俣 | L 古山、佐藤、澤田 |
| 7月29～31日 | 五十沢本流下部 | L 本図、古山、中居 |
| 7月31日 | 奥多摩・鷹ノ巣谷 | L 高田、長久保 |
- 【8月】 8月 7日 古賀志岩トレ

- 8月13～16日 【劔岳合宿】
- L 本図、古山、佐藤、告、
今井、鈴木、澤田

- | | |
|-----------------------|-----------|
| *チンネ中央チムニー～aバンド～bクラック | L 本図、告、澤田 |
| *チンネ中央チムニー～aバンド～bクラック | L 佐藤、鈴木 |
| *チンネ北条・新井～gクラック～eクラック | L 古山、今井 |
| *源次郎尾根 | L 鈴木、今井 |
| *劔尾根主稜 | L 本図、古山 |
| *八ツ峰（中退） | L 佐藤、澤田 |

- 8月19～21日 北ア・屏風岩
- | | |
|--------|---------|
| *東稜ルート | L 中居、佐藤 |
| *雲稜ルート | L 高田、古山 |
- 8月27～30日 劔岳周遊山行
- L 生井、村上（離脱）

【9月】

- | | | |
|----------|---------------|----------|
| 9月1～4日 | 五十沢本流（上部） | L 本図、古山 |
| 9月24～25日 | 劔岳の沢V字状岩壁右ルート | L 古山、澤田 |
| 9月23～25日 | 北ア・唐沢岳幕岩（中退） | L 本図、他2名 |

谷川岳東尾根

1994. 7. 3

パーティ L 本図一統、坂本昭裕、澤田仁、高田暢年、今井弘、馬淵勝則

10月も、もう終わりかなという頃、生井さんから電話がありました。『まぶち～、俺から電話ってことはアレだよ。原稿だよ、原稿。』

7月3日の谷川東尾根を書けとのご命令。

東尾根・ひがしおね・ヒガシオネ。三カ月も前の事だけに記憶が彼方に飛んでいる。でも書かなくては。困った、困った。

以下本筋

いつもの様に前日出発して、登山口の前でテントをはって小宴会。翌日、良くはないという天気。雨が降るという程でもなく、すっきりしない空模様である。途中雪渓を横断して、ますます湿っぽく感じる。雪渓が切れた所から、ガレ場、そして草つきと、単調な斜面が稜線までつづいている。この斜面は足場も悪くはなく、無難に登れた。(でも、ここを下るとなるとわたしには無理だろう。) 稜線にでても、獣道のようなものができあがっている様で、ザイルを使わなくても山頂まで行けそうである。しかし、それでは練習にはならないので、途中2～3箇所ザイルをだし、わざわざ道隣の岩部に進路を取ったりする。岩ではいつもヒイヒイっている私も(岩だけではないかもしれないが) そんなに難しくなく登れた感じがする。登攀中、沢田さんが、赤ちゃんの頭ぐらいのおおきさの岩を踏み抜いたので“ラーク”と絶叫してしまった。『なに慌ててんのぉ(笑)』と、あとで誰かに笑われたけど、あれが当たったら命が危ないと思うけどなあ。

稜線まで無難なく登りきり、そのまま山頂を踏んで、今回の山行も全員無事下山できて、おしまい。

ところで、話は変わりますが、この夏、高田さんからいただいた新田次郎の『孤高の人』と『栄光の岩壁』を読みました。いままで古山さんが“文ちゃん、文ちゃん”と呼ばれるたび、何のこっちゃ、と思っていたのですがこの本を読んで納得しました。“文ちゃん”とは優秀な社会人クライマーに与えられる“称号”だったのですね。

(馬淵 記)

待ちに待った南稜

1994. 7. 3

パーティ L 古山正文 佐藤文則

どんよりと曇った朝が又来た。それでも一ノ倉沢出合としては明るい方だろうか、近くの車でも出発の準備をする音がする。昨日の夜マチガ沢から借りてきた今井さんのランクルはすこぶる快適で（古山さんには一寸きつそうだが、佐藤はしっかりと足を伸ばせる。アァ小さくて良かった）朝飯も美味しくすぐに出発。

何だか部分的には落ちそうな気もする雪渓をサクサクと登る。テールリッジへは簡単に取っつき上を目指す。上部のFIXのあるスラブで後続に抜かれたが、ザイルを出して行く。その上でも踏み跡の中後続に追われる様に大急ぎで中央稜のテラスにつく。南稜テラスは取り付くかどうか考えるパーティで一杯である様なので此处で少し待つ。

1パーティ取り付いたので移動する事にする。少し登った所で又雨が降りだしたので、一緒にいたパーティと共に中央稜のテラスに戻る。又待ちである。オーバータイムを登るパーティを眺めたり、南稜をうかがったりしてひたすら待つ。突然大きな落の音、スローモーションの様にオーバータイムから、人と大きな（人より大きい）岩が落ちるのが見える。やったか？とっさにそう思った。あとで聞くと古山さんも思っただけらしい。しかし、ランナーもしっかりしていたらしく、本当に運も良く、トップはザイルにぶら下がり、2人とも落石に当たる事も無く無事の様である。ブルージックで登り返すのを見て一安心する。

さて、ようやく南稜テラスも少し空いた様なので我々も動く。濡れたトラバースは本当に嫌らしく佐藤はやっとこさでテラスに付く、が、まだまだ人は居てあと3パーティ目である。当然又、待ち、である。

漸く順番となり古山さんのトップで出だす。すぐにつかえてフェースを登った所でピッチを切り、佐藤が登るが、1ピッチ目のビレイポイント下で待たされる、という様な細切れピッチと待ちを繰り返し登る。登り4割、待ち6割位の感じである。登攀自体は問題もなく最終ピッチも古山さんが軽快なフリー（今風に言うとA0なのだが彼はフリーだと言い張るのである）でぬけ終了。

昼飯もそこそこに下降開始。先週事故があったとかで懸垂ピンのしっかりしたのが続いていて気持ち良く下りる。途中から後続の2人パーティと一緒に無事に下山。皆

の待つマチガ沢へと急ぐ。

コースタイム

一ノ倉沢出合 (5:00) - 中央稜のテラス (6:30) - 南稜テラス 取り付き (9:30) -
終了点 (13:00) - 下降開始 (14:00) - 南稜テラス (15:30) - 一ノ倉沢合 (17:00) -
マチガ沢 (17:30)

(佐藤記)



丹波川小常木谷

1994. 7. 10

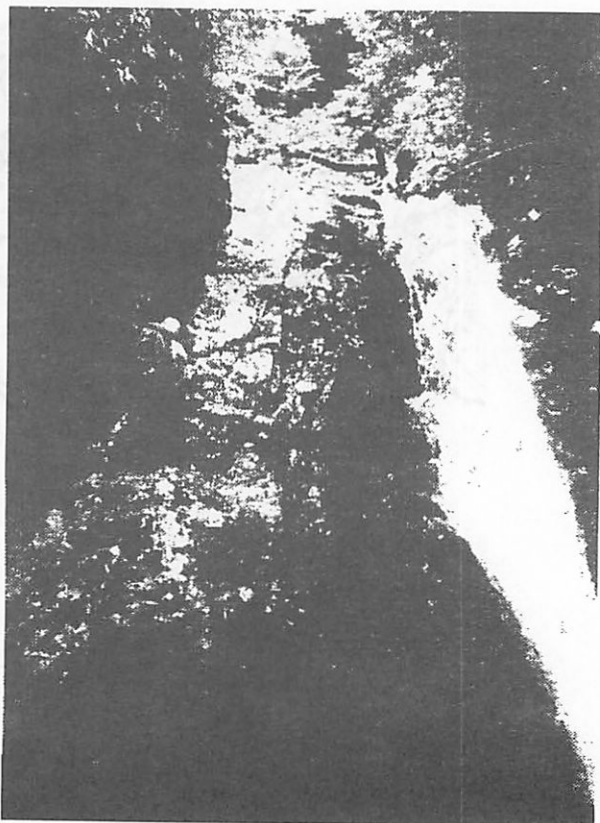
パーティ L 鯉河仁志 古山正文、本図一統、澤田仁、告広道、馬淵勝則、

正月合宿以来、持病となってしまった座骨神経痛も気温の上昇とともにおさまり、『山にでも行ってみっか』とそんな気分で今回の山行に参加することになった。文献によると秩父の谷歩きを志す人でなくても一度は訪れたくなる谷と書いてある。美しい谷である事を期待しての出発となった。

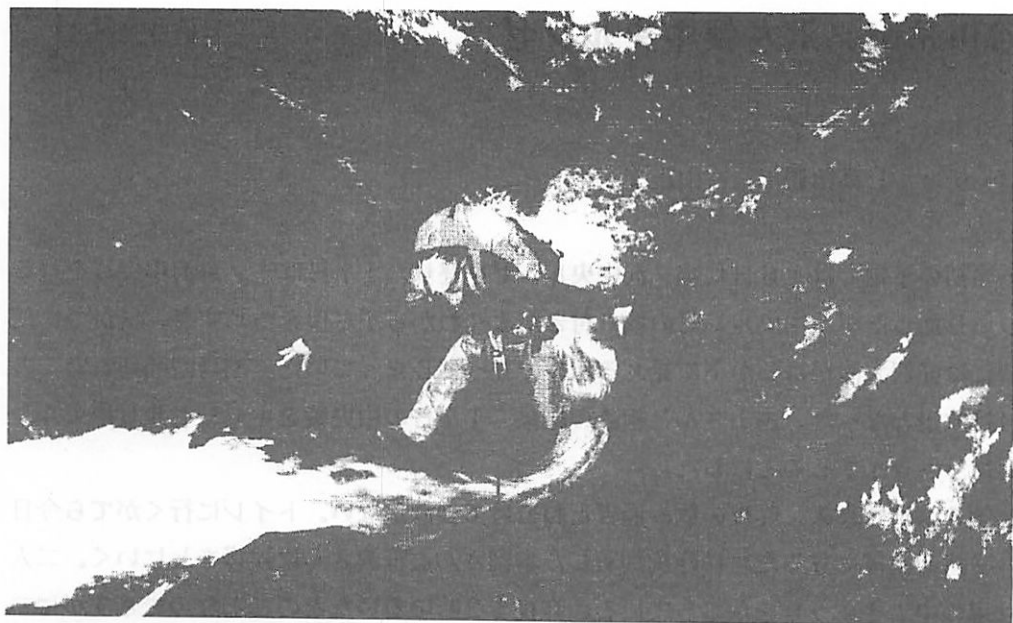
7月9日夜下妻に9時集合。川越、青梅と関東平野を横断、奥多摩湖上流丹波川余慶橋に着いたときには、12時を回っていた。早速宴会兼宿泊用のテントを旧余慶橋上に設営、馬鹿話しをしながらの宴会となった。昔の話しをすると笑われるが、俺が新人の頃には山で酒を飲むのは年3回の合宿の時ぐらいであった。何故こんな素晴らしい事に早く気が付かなかったのが残念だ。

10日の朝6時起床。何時もの様に慌ただしく身仕度、朝食、久しぶりの山行なので皆に付いていけるか不安になる。『支度できたか？そろそろ出発すっぺ〜』本図さんの合図で出発する。話しはそれるが本図さんの茨城弁は、年季が入っているなあと感心する。最近では俺の住んでいる県南では、茨城弁は、余り耳にすることが無くなった。百姓の俺でさえ標準語なのにやっぱり八郷町は遅れているのか心配だ。

出発した我々は、余慶橋先のカーブした地点より丹波川本流に降り徒歩で対岸に渡る。渡った所が出合で、そこからゴルジュ帯を進むとやがて火打石谷を分ける、小



大滝上段をリードする鯉河会長



逆くの字滝を登る…告

常木谷に入り小さな滝を幾つか越すと10mの水を落とす兆子ノ滝が現れた。

古山がトップで取り付く。俺は後輩の登りっぷりを見たくて彼らの後を登る。次に8mトヨ状の滝は、水に入り取り付き、トヨ状部分は流水を跨いで登る。次に2段18m不動の滝、2段15mの大滝と古山、本図のリードで難なく通過する。やがて、小常木谷最大の2段20mのネジレの滝が現れる。俺も後輩にいいところを見せたくなり、トップで取り付く事を志願する。後から野次だか声援だか分からない声に送られて取り付く。残置支点も多く、ホールドもしっかりしており、難なくクリアーする。ピレ一点に着くと、又下から野次が飛んでくる。俺も下にいる仲間に標準語で、『このくれえ～簡単だっぺ』と返す。

この滝上でこの谷の悪場も終わり、小さい滝2つを越すと椎茸沢に着く。我々は椎茸沢より更に上流に進み右岸の無名の沢をつめ岩尾根に取り付く。この頃から雨が降り始め何度も転びながらの下山となった。

小常木谷コースタイム

7月10日 余慶橋(7:19)－火打石谷出合(7:39)－兆子の滝下(8:36)－滝上(10:22)－岩岳沢出合(11:28)－椎茸沢の一つ上の沢出合(12:17~12:39)－尾根上(13:37~13:49)－余慶橋(15:19)

(鯉河 記)

谷川岳幽ノ沢左俣中央ルンゼ

1994. 7. 17

パーティ L高田暢年 古山正文

当初の予定では16日に幽ノ沢中央ルンゼを登り、17日は一ノ倉沢中央稜を登るつもりだったが、中央ルンゼの取り付きがよくわからず左俣をつめすぎ、気がついた時には滝沢大滝がはるか下に見える所まで登ってしまっていた。結局時間切れでこの日は敗退となった。古山さんと相談の結果、17日の中央稜をキャンセルし中央ルンゼにリトライすることにした。

朝3時半頃起床。昨夜の飲み過ぎとねむけで食欲がない。トイレに行くがてら今日一ノ倉沢南稜に登るために昨夜到着した本図さんと笹沢さんに挨拶をしに行く。二人は車の中できゅうりをかじっている。昨夜12時頃着いたとのことなのでさすがに二人とも眠そうである。特に笹沢さんは一ノ倉沢に入るのは今日が初めてである。緊張と不安と睡眠不足のせいかいつもの笑顔はなく、あまり元気もなかった。

4時15分出発。本図さん達に手を振り幽ノ沢へと向かう。幽ノ沢入り口から二股下の滝まではまだ雪渓が豊富で雪渓どうしに簡単に行ける。二股下の滝も下2/3位が雪渓に隠れており簡単に飛び移れる。ここより左俣へは右俣側の雪渓より草付きに取りつき左へトラバースするが、ここの草付きがいやらしく緊張する。左俣に入ると左側のブッシュの中の踏み跡を暫く登る。前日はこの踏み跡を登り過ぎ失敗してしまったので、今日は適当な所で左俣の雪渓に下りる。この雪渓を中央ルンゼ側へトラバースするのだが、前日敗退のとき上から偵察した時はそんなに傾斜はないと思ったのでアイゼンを車においてきてしまった。実際に取りついてみると結構傾斜がきつくスリップすると一気に下まで行ってしまう。古山さんは軽アイゼンを持って来ていたのでザイルをつけ確保してもらうが、もし私がスリップした場合古山さんを巻き込む可能性が高い。バイルは持って来ていたので雪渓に突き刺しながら慎重にトラバースする。ザイルを1ピッチ半のばしなんとか中央ルンゼ側にたどりつくが、雪渓がスッパリ切れており中央ルンゼとの間が広く開いておりとても飛び移れそうもない。しょうがないので雪渓にアイスボラードを作り4m位の懸垂下降でおりる。本などでこのような場合アイスボラードを作るやりかたは知ってはいたが実際にやるのは初めてなので、アイスボラードがもつかどうか不安だった。私が先に下り、次に古山さんが懸垂下降のときザイルがタイオフしてしまった。一瞬あわてたが私が肩をかし何とか体勢をた

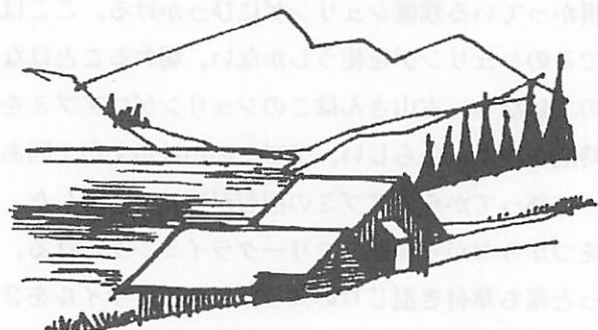
てなおす。なんとか中央ルンゼ側に下り「ホッ」とひと安心、その直後滝沢大滝の下
のズタズタに崩れていた雪渓が「ゴー」と地響きと共にブロック雪崩を起こし雪煙を
巻き上げながら雪渓の下を駆け抜けて行く。二人とも一瞬絶句しお互いの顔を見合わ
せた。もしこのブロック雪崩を雪渓のトラバースの前に見たらとても怖くて雪渓に下
りられなかっただろうと思う。ここで靴をクレッターシューズにはきかえ小ハング下
までのスラブⅡ級100mを登る。フリクションを快適にきかせ30分で小ハング下
につく。ここより登攀開始となる。まず古山さんがトップで20mⅣ小ハングに取り
つく。逆層で手頃なホールドが見つからず見た目より苦勞させられ、なるほどⅣ級だ
なと納得しながら登った。つぎに又快適な120mⅢスラブが現れ、大ハング下まで
一気にかけあがる。40mⅢ+バンド〜カンテを私が登る。ここより傾斜が一気にき
つくなり大ハングが一層近くなる。ルートは大ハングの右をまくように40mⅣ+、
A1(V+)凹角となる。中央ルンゼの核心部である。古山さんがトップで行く。右
の凹角にまわりこむと古山さんの姿が見えなくなる。姿が見えなくてもザイルが動い
ていると安心していただけるが、ザイルがとまったまま動かなくなると「何かあったの
か?」「そんなに苦勞するところなのか?」などと不安になる。やがてザイルの片方だ
けがスルスルとのびる。「おっ、着いたかな?」と思った直後、「ビレー解除」と古
山さんの声、ザイルに導かれるようにカンテを10m登り右の凹角に入る。下はスッ
パリと切れており、いままでのスラブに比べると高度感が一段と増す。アブミを取り
出しハーケンに掛かっている残置シュリングにひっかける。ここはハーケンまでは遠
くて届かないのでこのシュリングを使うしかない。切れることはないと思うが、あま
り気分のいいものではない。古山さんはこのシュリングにアブミを引っ掛けるまでの
決断にたいそう時間がかかったらしい。アブミのかけかえが1回ありそこからフリー
となるが、フリーに移ってからのアブミの回収が遠くて苦勞した。ここからはガッチ
リしたホールドをつかみながら快適なフリークライミングとなる。このピッチが終わ
ると、傾斜はぐっと落ち草付き混じりのスラブになる。ザイルを2ピッチのばした後、
踏み跡をたどり中央壁の頭に出る。ここで登攀具を片づけさらに堅炭尾根まで登る。
堅炭尾根に出て本図さんと無線交信をする。本図さん達は既に南稜を登り終え車の所
に戻っているとのこと。簡単に交信を済ませ無線機を片づけていると、滝沢大滝に登
って来た男性2人のパーティの人に「あんたたち、もしかしたら茨城からきたんじゃ
ないのか?」と聞かれた。「ええ、そうですけど」と答えると。「やっぱりそうかね、
いや〜私の娘が日立に嫁いでいてね、孫がね今みたいな喋り方するんだよ」と言わ
れた。その人は群馬の人らしい。私は群馬の方言をあまり聞いた事がないのでどう違

うかよくわかりません。だれか詳しい人がいたら教えて下さい。下りは中芝新道を下る。以前は迷いやすい道だったが、地元の山岳会のおかげだろうかルートがよく整備されており、わかりやすくなっていた。一気に下り芝倉沢に下りる。ここで二人ともおなかがタッポンタッポンになるまで水を飲む。芝倉沢の出合いまでも雪渓を一気に下り、又出合いで水を飲む。今日は大変天気にも恵まれ暑かったので、汗を大量にかき脱水状態である。あとはてくてくと旧清水街道を歩き一の倉出合いで本図さんたちと合流する。笹沢さんも朝の緊張した顔とはうって変わり、登り終えた満足感と充実感で満ち溢れた顔をしていた。帰りは2台つるんでいつもの温泉に入り、茨城へと戻る。

コースタイム

出発(4:15)ー幽ノ沢出合い(4:30)ー中央ルンゼ(7:00)ー小ハング下(7:30)ー
堅炭尾根(12:00)ー一の倉出合い(14:30)

(高田 記)



念願の谷川岳・一の倉【南稜】

1994. 7. 17

パーティ L本図一統、笹沢ひろみ

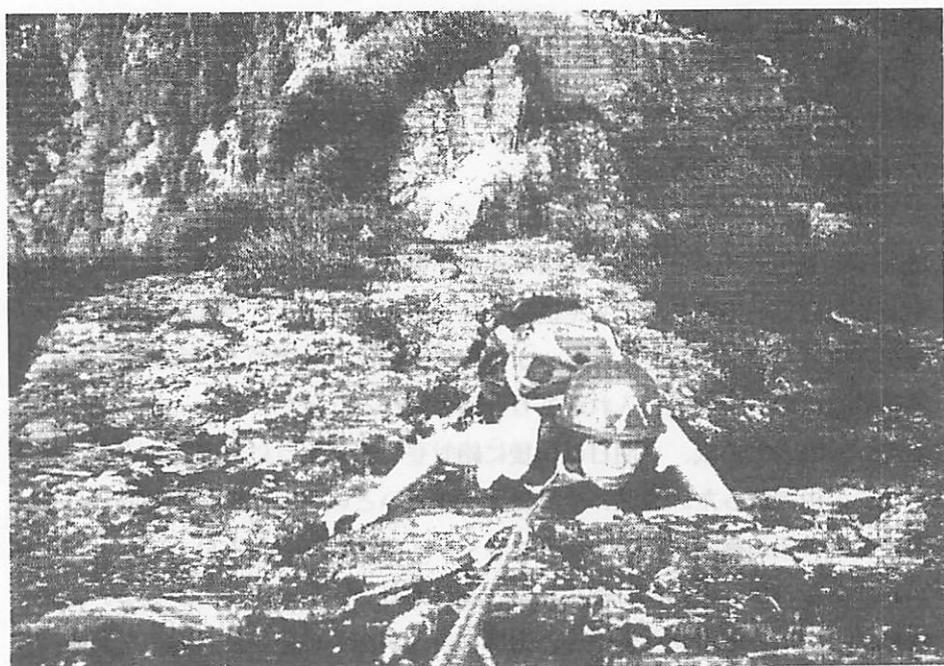
『南稜やってみっか?』と本図さんより連絡を受け、ちょっと戸惑った。久しく岩トレもやってないし…本ちゃんだしやばいかなあと思ったけど、今なら残雪があってアプローチも楽ちんだし…何年ACC-Jやってたのよ…念願の一の倉デビューじゃない…と私の心の中で強い思い入れがあり今回の山行となった。

前夜出発し一の倉で仮眠、『明日は南稜に絶対登れますように…お母さん守って下さい…』と心の中で祈った。翌朝、今日は天気が良いということで出発。私にはどんより上部のガスの圧迫感でなんとも陰気くさく、すがすがしい朝というイメージでなかったが、でもこれが一の倉の特徴らしい。ふむふむ…雪渓を1歩1歩登る。息苦しいような熱風と冷たい風が交互に吹く、上部にガスがかかっている。何故が緊張していた…解からないものへの不安を感じていた。やっとテールリッジに到着、ここはアプローチだと言われながら何か所か確保してもらった。徐々に目の前にバーンと一の倉が姿を現わし始めた。凄絶な光景とはこういうことか、もう引き返せない。



まだ余裕のある笹沢さんちのひろみちゃん

(56 兄弟)



最後のフェースを登る笹沢

絶対登らなければという私なりの覚悟が出てきた。本図さんのマインドコントロールにかかったのか？気持ち次第で気分もすっかり変わるものでやっとなペースがつかめてきた。目の前の展望を楽しみながら南稜テラスへ。一番乗りだった。フラットソールの紐をしっかり締め、いよいよ登攀開始。岩は乾いていてホールドもしっかりしている。チムニーの所は、身動きが取れなくなったらどうしよう…と思ったけど特に問題なく登れた。高度感があり下を見ると吸い込まれそうだ。時々本図さんが写真を撮ってくれた。『あわてないでしっかり登ろう…』と自分に言い聞かせながら最後はフェースで終了。やっとな望みがかなった。その後は喜びも束の間、大嫌いな懸垂下降で下る。後続パーティが何パーティかいたので十分気をつけた。テラスでは高田さん、古山さんパーティの無線交信を待ちながら、夏の日差しが強く差し込む中充実感にひたっていた。下山途中、雪渓での氷小豆、一の倉をバックにしたお見合い写真、大変有り難うございました。帰りは高田さん、古山さんと合流、温泉に入ってからさっぱりとして帰ってきました。

コースタイム

7月17日 出合(4:24)－南稜テラス(6:08~6:25)－終了(7:54)－

南稜テラス(9:12~9:35)－中央稜基部(9:50~10:08)－雪渓(11:22~11:40)－

出合(11:56)

(笹沢 記)

白水沢・左俣

1994. 7. 24

パーティ L 佐藤文則、古山正文、澤田仁

乾いた岩に行きたいと言う古山氏の希望を叶えないわけではないが、今回は沢に付き合ってもらう事にした。本番も一度も行ったことの無い澤田さんも行くと言うので経験のある沢から、と思っただけで、古山さんに恨みがある訳ではないのだから許してほしいと思う。（暫くこの時の恨みを聞かされたので、ここで弁解しておく。）

甲子温泉と奥甲子温泉がよく分からず、1度引き返したりしながら奥甲子温泉手前の空き地に車を停め、一杯やる。澤田さんは飲まないと言うので遠慮無く古山さんと2人で飲む、当然（佐藤）は少量、古山さんは大量であるが・・・。

さて朝が来て動き出すのだが、岳人に掲載された所だから人も多かろうと思っていたが、白水沢への入渓は我々だけのようである。LUCKY!

温泉の裏手の古い山門らしい門を抜け、直ぐに阿武熊川本谷を渡る。砂防ダムのお陰で沢という感じではない。最初の10mの滝を登ろうと沢に降りてみるが水量が強く、とても登れそうにも無いのでおとなしく巻くことにする。登山道に戻るだけの巻なので苦労は無い。8mの滝から改めて入渓する。勿論直登。続く傾斜の緩いナメ滝も快適に越える。

さて、この沢の核心部の一つであると思われる25mの滝を登る。私がトップで登ったが、2ヶ所位ランナーを取ったような気がする。しかし、それ以上の記憶が殆ど無い。おそらく易しかったのだろう。その後暫くはザイルは出さずに登る。ここで佐藤と古山さんの違いが出る。佐藤はどうせ沢だからとじゃぶじゃぶと沢に入り、一方古山さんは極力水に入るのを避けて登るのである。澤田さんの習性も直ぐ判るだろう。

右俣を右に分け。更に行くと、一の沢と二の沢の出合に出る。ここで小休止を取る。澤田さんは、研究所に持ち帰るとの事で土を採集している、やはり彼も変な人である。

二の沢に入るが、いきなりヌルヌルとした滝である。ちょっと嫌らしいのでザイルを出す。ここは古山さんに行ってもらう。易しいらしくランナーをちいっとも取ってくれないので、取るように言う。行ってみると、確かに傾斜は緩いが、ヌメリがすごく私は嫌いである。

この後は3m～4mの滝が有り、水流が線のようになってきた辺りで左右共ほぼ同じ水量の滝となる（とはいえ、ほんの少しの水しかない。）ここでどちらに行くか迷い、一度右の滝のほうへ上がるが、直ぐ藪の濃い斜面のなるようなので降りて左の滝

をつめると、こちらはまだまだもう少し沢があり潤れた滝などを越え、少し藪の斜面を上
がると登山道に出る。

折角なので、登攀具をしまった後で、頂上に行き飯にする。頂上で南沢から来た人
と会い、話を聞き南沢にも行きたくなった。♥古山さん、又来ようね。♥

(佐藤 記)



五十沢中部下部ゴルジュ帯突破

1994. 7. 29~31

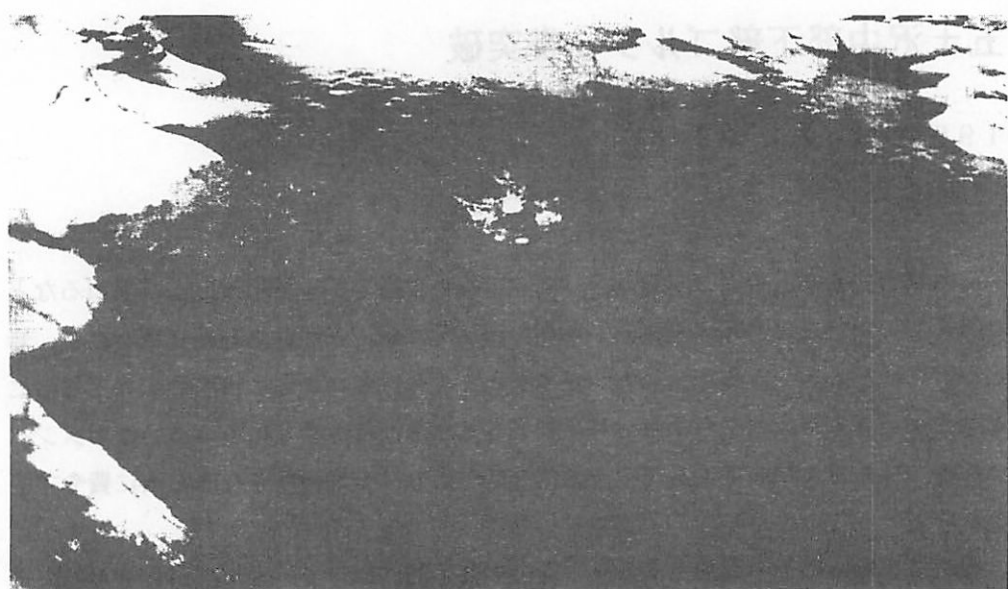
パーティ L本図一統、古山正文、中居康展

5月に古山さんとウメコバ沢を登ってみて、体は重いがまだ思ったより登れるなどと考えていた。さて今年の夏休みを如何に過ごそうか、去年は単独縦走だったし、岩とか沢とかバリエーションのにおいがするところへ行きたいなと古山さんのところに電話をかけてみた。何やら7月の月末に難しそうな沢に行くという。幸いにもメンバーに加えてもらったので、夏休み一週間を二つに分けて最初の4日間を沢に費やす事とした。

場所は巻機山にその源を発する五十沢の中部下部ゴルジュ、去年庄司ちゃんと米子沢を登った時に巻機山の北面にすごいスラブの連なりを見た覚えがある。わくわくしながら前日は東京へ買い出しに出かけ、地下足袋から溪流シューズへと足回りを買い換え、更にウエットパンツやライフジャケットまで揃えて（このくらいしか贅沢できないのだ）出発した。五十沢キャンプ場に到着したのは夜中の2時頃。明日の快晴を祈ってビールで乾杯。古山さんは今回買い替えたばかりというスペシャルデラックス紳士用折り畳みベッドでいつもの通り外でおやすみとなった。

今回も暑い一日となりそうである。装備一式を詰め込み、さっそく林道歩きとなったがキャンプ場をでたとたんアブの襲来である。これはとんでもない沢に来てしまったぞなどと思いつつ、虫除けスプレーを全身に降りかける。少々虫のよりかたが違いうようだ。巨岩帯が行く手を阻んでやたら時間がかかる。おまけに沢の水は幸か不幸かそんなに冷たくはない。早々にウエットタイツに着替えてしまった古山さんは余りの暑さに淵の中につかったままである。巨岩帯を高巻いていると左手に地図に載っていない登山道を見つけそこからは登山道を辿りあっという間に不動の滝に着いた。

今日はここをビバーク地として準備する。岩小屋もあってなかなか快適である。不動の滝は古い記録では右岸より人工登攀で突破されているが残置が見当たらずここは左岸から高巻くことにした。昼食を食って登山道を少し登り何となく踏み跡っぽい藪を漕いで滝場の上に着いた。1ピッチ懸垂し沢身に立つ。澄んだ水と青空のコントラストがさわやかだ。早速古山さんがライフジャケットを着けて淵を突破、左岸より登る。沢は急に狭まり深いゴルジュを形成する。この辺りには釣り師も入らないようで魚影が見え隠れする。15メートルの足の届かない深い淵を泳ぐと15メートル滝

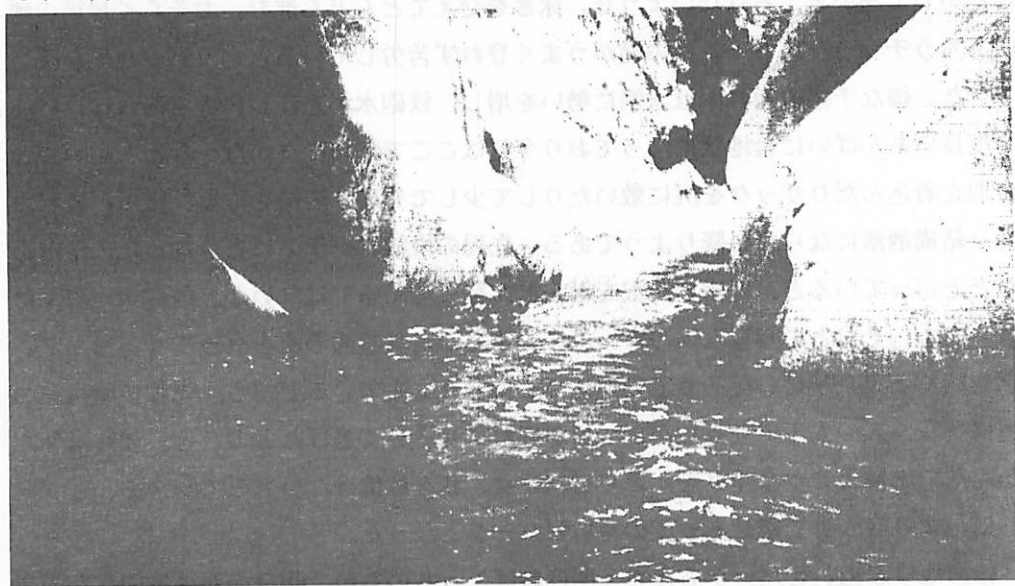


不動の滝上を泳ぐ中居

が現れる。ここは直登出来ない。左岸にルートが取られているようなのだが判然としない。縦クラックの先に錆びたハーケンが見えるのでここがルートらしい。まず最初にハーケンを2枚打ち、人工で登らせてもらうが5メートルほど登ったところで錆ついてやせ細ったリングボルトにどうしても乗れずトップを古山さんに交代した。古山さんがぐいぐいルートを伸ばしていくが、やはり所々残置がはつきりせず苦勞したようだ。本図さんがその後をフォローし、最後についていったが最近では誰も登っていないようでボルトもピンも見つけずらい。よくもまあこんな所をリードしていったものだ。若干登り過ぎのようだが1ピッチ懸垂して沢身に戻り再び遡行開始。兩岸はいよいよ切り立ち、ものすごいゴルジュを形成している。ここからは小滝をショルダーで越えたり、泳ぎ混じりでゴルジュを突破したり of 楽しい遡行が続く。少し谷が開けてきたかなと思ったら、取水口が見えて下部ゴルジュは終了した。昔の記録では取水口を境に水量がぐんと多くなるとのことであったが案外に水量は少なく、初っぱなから泳ぎにはならない。時間も早いので少々ルート工作をと言うことで、進むと2メートルほどの小滝と淵が現れた。泳いで滝の前まで行くと水面の2メートルほど上にボルトがありこれを取れば登れそうである。古山さんが滝下のクラックにバイルを引っかけてハーケンを打ち本図さんがアクロバチックな人工で滝上に這い上がった。今日のルート工作はここまでとし、これで1時間はかせいだななどと言いながら登山道をビバーク地まで戻る。登山道からは下部ゴルジュのごく一部しか見えないけれど上から覗き込むのもなかなかの迫力である。半日かけた行程もあつと言うまでビバーク地に

到着する。宵闇が迫る前に本図さんは川に食料を求めに行く。今回は軽量化の名の下に極めて貧しい食料計画なのだ。魚影は認めるもののみんなの期待虚しく食料の追加は無し。しょうがないのでジフィーズ2食を3人で分け後は味噌汁の夕食を取る。勿論酒も乏しいので焚火が落ち着いたところととところ寝を決め込む。心配していたアブの襲来もなく、天気は快晴。満天の星のもと、食べ物以外は凄く贅沢な夜が更けていった。

朝、辺りが何となく明るくなってくる頃、もう一寝入りくらい出来るかなと言う頃に何となく冷たいものが顔に当たる。何と雨である。何とも一日の始まりとしては気持ちの良くないものだ。荷物をまとめて岩小屋に避難する。暫くすると雨は上がり空もようやく夜が明けた明るさとなった。朝飯はアルファ米1.5袋分をお茶漬けにしかただけで終わり。今日は中部ゴルジュの突破を目指し荷物をまとめて出発した。



中部ゴルジュ帯を泳ぐ

初っぱなから泳ぐのもあまり気持ちの良いものでないが、昨日のルートワークで遡行がスムーズなのは良い。ボルトにかけたアブミを力任せに攀じ登り滝上に立つ。ここから先もすぐに泳ぎでライフジャケットを着込んでどんどん進む。ゴルジュは深く水中の岩に立ったりできる以外は足が立たない。どうやら大高巻きの滝まで来たようだ。直登もできないしゴルジュが曲がりくねっているので滝そのものも良く見えない。左岸に這い上がりルートを探す。昨日の人工よりかはハーケン、ボルトははっきりしており嫌らしい草付きも少ない。古山さんがトップで登り、本図さんがセカンドで続く、本図さんは更にトラバース気味に登りボルトを打ち込んで懸垂支点を作っていた。や

や振子気味に懸垂して滝上に立つ。ここからまた泳ぎである。ゴルジュがまたぐつと狭まり、右手に直角に曲がるとまた滝が2つ連続する。記録では右岸のルンゼを登り滝を2つ分トラバースして本流に降りている。このルンゼがなかなか嫌らしく、本図さんがハーケン2本ボルト1本打ち登って行く。更にルンゼからトラバース出来そうなどころまでどんどん登って行くが2ピッチむしろ追い込まれる様に登ってしまいルート自体はつきりしなくなってきた。しょうがないので本図さんが殆ど木登りピッチでどんどんトラバースし、1ピッチ懸垂して更にトラバース、本流を見下ろすリッジに出て一安心。藪を2ピッチ懸垂してようやく本流に降りた。いい加減水が切れてオーバーヒート気味だったので生き返った。丁度後続パーティが一つ目の滝を突破して二つ目の左岸をトラバースしている所だった。水と食料を補給して再び遡行開始。後はたいして悪いところはないようだ。泳ぎを交えてどんどん進む。おそらく最後の難所であろうチョックストーン状の滝がうまく登れず苦勞しているとパラパラと雨が降ってきた。嫌な予感の通り雨は次第に勢いを増し、鉄砲水が恐ろしいので高台に逃げる。丁度良いあんばいに台地状になっており今日はここでピバークかな～などと思いつつ合羽を着込んだりザックを尻に敷いたりして少しでも楽な姿勢を取る。雷もピカピカ光り結構洒落にならない降りようである。先程の後続パーティはどうなったのかなあなどと言っていると、増水した沢をどんどん登ってくるではないか。鉄砲水が恐くはないのか、それとも知らないのか、よくもまあこんな状態の所を登ってくるもんだ。話を聞くと東京YCCだそうで先週もここに登りに来ていると言う。先程の滝は一つ目はフレンズの人工で登ったが二つ目が登れず高巻きで逃げたとのこと。彼らは何だかんだで準備よくツエルトをかぶりピバーク、我々は情けないものでレスキューシートに包まり3人身を寄せあつての寒いピバークとなった。

惨めなずぶぬれピバークも夜さえ明ければこっちのもの。昨日の滝は本図さんのスーパークライミングで突破。その後はさして難しいところもなく四合目に到着。中部ゴルジュの遡行は終了した。さてここから下山であるが、一般道としては入山者も少ないようで道は以外に悪くおまけに蒸し暑いので閉口した。取水口で一浴びした後ピバーク地に戻る。昨日の増水が思ったより高くまであったようで、焚火の後は流されていた。やけにうまいラーメンを食い（本当に3日ぶりくらいのまともな食事）荷物をまとめて下山となった。下界はオートキャンプの家族連れで賑わっており何となく場にそぐわない我々は早々に茨城への帰り道に着いた。

（中居 記）

M氏の災難

車山行で、いつも鍵を持って入山するかどうか考えるところである。私も以前、プロと思われる車上泥にやられた経験があるので、貴重品や鍵の扱いには非常に神経を使う。その時は長期の山行だったので、車の近くの大きな木の根元に埋めて入山した。下山して埋めた所を掘っても鍵がない。見ると既に掘られた形跡がある。探したところ、少し離れた所に無残な姿で見つかった。それは、革製のキーホルダーがボロボロに食いちぎられた哀れな格好だった。私は、ブランド商品というようなものは持っていないが、このキーホルダーはサイフとセットになった唯一のものだったのだ。おそらく犯人は、腹のへった野ねずみだろう。鍵が見つかってよかった。みなさんも鍵の隠し場所には気をつけよう。

(M)

奥多摩・日原川鷹ノ巣谷

1994. 7. 31

パーティ L 高田暢年、長久保加寿子

沢登りの入門ルートとして鷹ノ巣谷を選んでもらい、今回沢登り初挑戦をした。

入渓当日は天気も良かったせいか周囲の木々の緑がとてもいい表情をしており、高度もあるせいか真夏だと言うのに風はひんやりと心地よかった。又あふれんばかりの自然が残されているのを感じた。

又、入渓直後には釣り人の教えによって鹿を見ることもできた（実はこの鹿は川の中でもうすでに死んでいたものであった。）

そして、ゼルパン、ヘルメットをつけていざ入渓。取り付き上を見上げると先行パーティがいる。又、沢の様子に少々不安をおぼえた。入門コースとはいうものの私に登れるだろうか？……。私の顔はいくぶんひきつっていたのではないだろうか。）ザイルは持ったし、高田さんも付いていてくれるしと、気を取り直して沢に足を踏みいれてみる。水は結構冷たい。最初は余り身体を濡らさないようにと思っていたがだ



沢登りが好きになりつつある長久保

んだん登るにつれて、沢の中に身体をいれるのが快適になってきた。不思議なもので

ある。

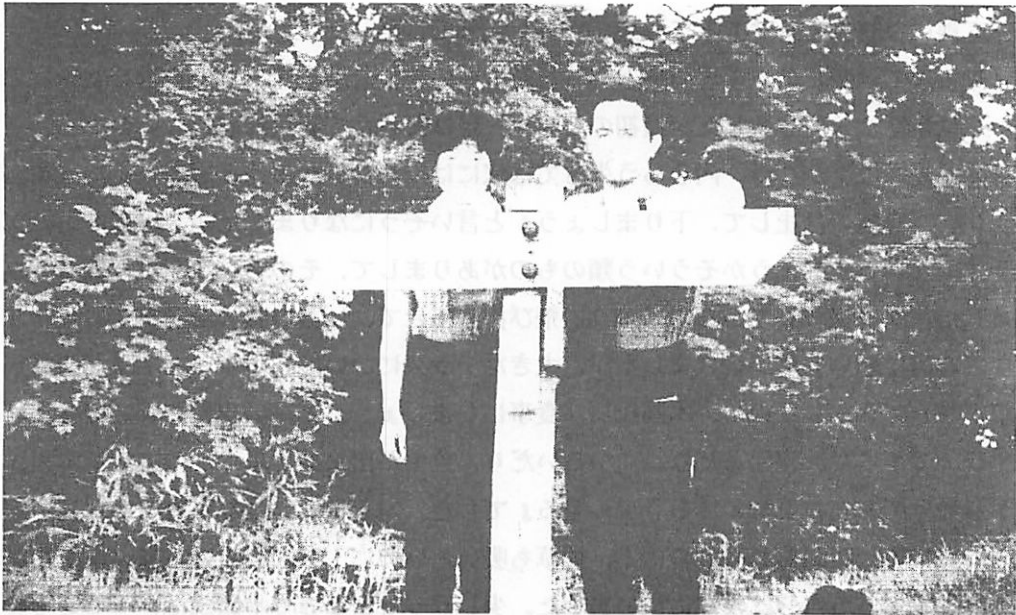
途中文献によるとワサビ田、仕事道らしきものを目にしながら、ザイルを何回か使用し、小滝、大滝を超えて、ほぼコースタイム通りに林道まで出ることが出来た。しかしそこからが私にとってとても辛い登りとなった。5歩も歩くともう心臓はドキドキ、息はハアハア、足はガクガク、体が濡れたせいだろうか、お腹が空いたせいだろうか……。 (私にとって初めての経験であった。) このためにここからのコースタイムは2時間位の遅れとなり、日原の駐車場に付いたのはすでに夕方となっていた。行きはよいよい、帰りは怖い。そんな感じの沢登りであった。終始見守ってくれた高田さんには感謝の気持ちで一杯である。今回に懲りず、又連れて行って下さいね、よろしくお願いします。

7月30日－高田さん宅出発(21:10)

7月31日－日原着(1:30)－日原発(7:10)－入溪(7:30)－大滝上(10:00)

－鷹ノ巣(14:00)－日原着(17:00)

(長久保 記)



鷹ノ巣山頂にて…長久保、高田

1994・夏合宿・剋岳チンネ

【中央チムニー～aバンド～bクラック】

1994. 8. 13～16

パーティ シ本図一統、澤田仁、告広道

眠たかった扇沢までの車の運転、混雑していたトロリーバス、故障により乗車を待たされたロープウェイなど、辛いこともありましたが、その分を差し引いてもとって余るほど室堂からの山々の眺めは美しいものでした。途中、連絡ミスから2人が遅れるというトラブルもありましたが夕刻には、全員無事真砂沢キャンプ場に着きました。

夕食は、佐藤氏の凝った食事のメニューに一日の疲れをいやされる思いでした。

翌日、5時にキャンプ場を出発、初めてのアイゼン装着による雪渓の登攀は最初は不安でしたが心強い山のベテラン達に囲まれての登りでしたので途中からは八ッ峰の荒々しい岩を眺める余裕も出てきました。九時近くに三ノ窓に到着。ここで本図氏、古山氏が翌日の登攀に備えてテント場を確保しに行っている間、強い夏の日差しを浴びて裸になり雪を食べてとても満たされた気分でした。

ここまでは楽しい夏の思い出といった類のものでしたが、チンネの登攀を開始してからは事態は一変しました。最初のピッチ、足は振るえて満足に登れないのです。下を見れば頭はクラクラ、内心もう生きては家には帰れないだろうと思いました。本図氏に、『登るのは止して、下りましょう』と言いそうになりましたが、僕にも男のプライドと申しましょうかそういう類のものがあまして、その言葉をぐっと飲み込みました。グラグラしている手がかり、飛び出してきて、いちいち人を脅かす岩ヒバリなど心臓に悪い登攀が続きましたが、大きなテラスについて“ホッ”とすると何だか腹が減ってきましたので、本図氏に『食事にしましょう』と言いました。とても広いテラスですので、寝転んだり、くつろいだり、食事が出来たと思ったのですが本図氏から帰ってきた言葉は、『もう少し登る』でした。内心私は、『なんでこんな良い場所なのに！、時間もお昼なのに！、煙草も吸いたいのに！』といろいろ考えましたが、山の弱者である自分は先輩に従いました。少し登ったところで本図氏は、『ここで食事にしよう』と言いました。『何でこんな所で!? さっきの所の方がず～といいのに！』と思いました。その時はです、その時は。でも今振り返ってみるといくつかの事が思い出されました。

①…その場所は2つのルートの分岐点だった事。

②…後続パーティ（他の会の人）がいた事。

③…自分と澤田は、新人である事。

ということです。

その場で本図氏が、後続パーティにどのルートに登るのか聞いていましたが、きっと同じルートに登ると言われたなら食事を中断して先に登ったと思います。

何故かと言うと…、

①…先行パーティがいると落石が怖い。

②…先行パーティがヘタクソだと何時間かかるか分からない。

③…新人2人を引っ張ってのトップなので登攀スピードが遅い、誠意心的苦痛が大である。などです。

そこに山のベテランの最悪を考えての登攀をかいまみることが出来ました。その時に恨んだことを紙面を借りてお詫び申し上げます。

『スマン、スマン』…チンネの頂上に着いたときの精神的解放感は何と表現したらいいのかわかりません。そう一番近い言葉でたとえるなら、『天に登って行く。』でしょうか。

先輩方にチンネよりの展望の説明を聞きながらくつろぐのは最高でした。本番の時の1つ1つのことを素早く、冷静に出来ることの難しさは下界に居ては分からないものです。や



aバンドに登る告と澤田

はり何度も山に登って経験を積まないと、トップを引くなどとても無理だと言うことが分かりました。そういえば別ルートに登っている古山氏と今井氏は、やけに遅いなあと思っていた矢先、『ゴツ』という鈍い音と共に落石がちょうど2名が登っている辺りに落ちていきました。『2人は逝ってしまったか』などと縁起でもない事を考えながら待っていると、2人は無事登ってきました。後で聞いてみると先行パーティの登攀スピードが遅い為に遅れてしまったとの事でした。

早々に道具をかたづけ下りを開始しました。明日、別ルートに登る本図氏と古山氏と別れ、池ノ谷乗越までくると、ここからいやな雪溪のくだりなので、アイゼンを装着していると、『プチッ』といやな音と共にアイゼンのベルトのピンが、もげてしまいました。『ああ！買ったばかりなのに！これでこのパーティの足を引っ張るのは確実だ。』うつむきながら、心の動揺を悟られない様に、今井氏にさりげなく『アイゼンのベルトが壊れちゃった』と言いました。すると今井氏は何事も無かったように『そんなのシュリングで縛ればいいんだよ』と言ってくれたので、心がずいぶん楽になりました。（このアイゼンを買ったICIによるとシモンのアイゼンのベルトのピンはよくもげるそうなのでICIにて強いものにすべて交換するとの事でした）くたくたになりながら何とかテント場に到着。再び佐藤氏の凝った食事を食べながら酒を飲もうと思ったのですが、軽い高山病か、それとも緊張の連続だったからか頭痛がして酒を飲む気になれず、食後にすぐ寝てしまいました。

翌日、仕事の都合で下らなければならないので再び別ルートに登る皆さんと別れて下り始めました。丸山東壁を眺めたりしながら下って行き、一服しようと思っていると『おたくは、ピッチが早いね』とある登山者におだてられました。おだてに弱い僕はくたくたで休もうかと思っていたのに、何となく休みずらくなり結局、黒四ダムまで歩いてしまいました。黒四ダムの上で放心しながらコーヒーを飲んでいると何人もの中年のおばさん達が何処に登ってきたのかと質問してきて、さしずめヒーローインタビューの様でした。内心『おばさんには、興味ねえんだよ』と思いながらも一人一人に説明してしまう自分をかわいい奴と思いました。トロリーバスに乗ると、何となく変な匂いがするのに気がつきました。『しまった』と思ったのはもう遅く何と僕はテント場で出た残飯を持ったまま満員のトロリーバスに乗ってしまったのです。暑い日差しを浴びた玉葱などはとてもかぐわしい臭いを発していました。しかも、藪道歩きが結構あったのでビニール袋に穴まで開いていたのです。そういえば何となく回りの人たちの目がやけに陰しいな……。この方達にも紙面を借りて謝ります。…

『スマン、スマン、』

結局、このゴミはトランクに入れたまま、また捨てるのを忘れて僕と共に無事茨城に到着しました。

コースタイム

8月14日

真砂沢出合(5:08)－池の谷乗越(8:25~8:57)－三の窓(10:08~10:30)－中央チムニー
取り付け(10:40~10:53)－チンネの頭(13:36~16:18)

(告 記)



(55 202)

夏合宿 剋岳チンネ中央チムニー～aバンド～bクラック

1994. 8. 14

パーティ L 佐藤文則、鈴木操

どピーカンの青空の下、合宿二日目、登攀第一日目、希望と不安に胸を膨らませながらBCの真砂沢を後に長次郎雪渓を登りだす。今日の目標は左下カンテ～左方カンテである。最初は順調に、段々バテ気味になり、熊の岩を過ぎる頃にはすっかりよめきながらの登りとなる。元気なみんなを羨ましげに見上げながら一步步登る。池ノ谷乗越に付く頃にはすっかり日は登り、本図さんは呆れ、予定ルートの変更を命じられてしまった。三の窓に下り本図さんと古山さんがピバーク地を探しに行く間雪渓の上で待つ。気持ちはいいが、流石に悔しい。見ていると登れそうな気はして来るのだが……。古山さんゴメン。さて気を取り直して中央チムニーに取りつく。本図・告・沢田パーティの後ろなので楽な気持ちで登れる。上のパーティを冷やかしながら易しいチムニーを登る。2P目のチムニーから出る部分がちょっといやらしいがフリーで何とかなる。直ぐ上が中央バンドの様なので此処は鈴木さんにトップで行ってもらう。ピナクル下まではコンテで行き少し待つ、上が詰まっているようである。aバンドは出だして少し岩から体を離す以外は本当に簡単で続くbクラックには少し戻って取りつく。手の何だか掛かりにくいクラックに手を半分入れ足が上がると後は簡単で最後のピッチはまた鈴木さんに任せて終了。

後は古山・今井パーティを延々まって下山。

(佐藤 記)



チンネ・北条新村ルート

1994. 8. 13~16

パーティ L 古山正文、今井弘

今回の劔岳は、ACC-Jに入会して2回目の山行である。

1回目は、谷川岳の東尾根を登りました。雨上がりのためか、岩は滑るし、草付きも滑る、お世辞にも快適な登攀とは言えなかった。

本日8月14日は天気は快晴。絶好の登攀日和である。逸る心を抑え長次郎雪溪を登る。2時間位で登れるのではと思うのだが、結局三ノ窓まで4時間位かかった。

三ノ窓では、本図、古山さんがテント設営中、我々鈴木、佐藤、告、澤田、今井の5名は、雪溪で上半身裸で日光浴をしたり、雪を水筒に詰めたりして長閑な時間を過ごしていました。やがて本図さんと古山さんが来て、『今井、古山で北条・新村ルートを登れ』との本図さんからの指示が出ました。

私は、全員で中央チムニー～aバンド～bクラックを登るつもりでいたので、一瞬不安になった。それと言うのは、古山さんの足手まといになるのでは…と思ったのである。古山さんには申し訳ないと思いながら北条・新村ルートに移動する。

1ピッチ目から先行パーティに、15分位待たされた。やがて古山さんが登り、続いて私が登った。ガバが多く快適だった。

2ピッチ目も先行パーティに30分位待たされた。古山さんが、2ピッチ目の半分位登った時である。落石が古山さんを断続的に襲った。幸い怪我は無かった。

3ピッチ目のビレーポイントから上を見ると先行パーティは、アブミを出して四苦八苦しているのが見えた。困った事に私はアブミを持っていないのである。古山さんに相談したところ『A0で、どんな事をしても登ってください。』と言うのである。

古山さんが登っていき、やがてビレー解除の声。いよいよ来るときが来た。最初の6m位は難なく登れた。これからが核心なのである。先ずクラックに右腕を入れジャミング、左手で、ヌンチャックを外そうと腕を一杯に伸ばすがあと30センチの所で、どうしても届かない。行き詰まってしまった。もう一度周囲を見ると右腕の右上にハーケンがあった。ハーケンに！シュリングを掛け、右腕でシュリングを掴み、左足を大腿開きして、徐々に体重を掛けた。下を見ると、ゾッとする様な高度感なのである。

そしてヌンチャックを外して、シュリングを掛け替えた。掛け替えたシュリングに掴まり『古山さんテンション一杯、出来れば引っ張り上げちゃってください。』と大声で叫んだ。右手でシュリングに掴まり左手で小さなホールドを見つけホッとす。少し登ると古山さんが、ニコニコ笑顔で『速かったじゃないですか』と言ってくれた。

決して速くは無いのであるが。

中央バンドに出ると浮き石でいっぱいであった。石を落とさない様にピナクルの横を通り、gチムニーに向かう。ピレーポイントでセルフピレーをしている時、『ラ〜ク』の声が聞こえ、2人とも岩影に身を寄せた。登り終わって聞いた事であるが、かなり大きな落石だったらしい。gチムニーを登攀してeクラックを2ピッチで登攀し終え、皆待ちくたびれた顔で岩に腰掛けていた。でも私はチンネを登攀出来て久しぶりに感激しました。

(今井 記)



源次郎尾根（中退）

1994. 8. 14

パーティ L 鈴木操、今井弘

今日も快晴である。

八ツ峰のパーティと別れ、源次郎尾根～劔山頂～池ノ谷乗越（6名合流）～長次郎谷
これが今回のルートでパートナーは今井君である。

本格的な岩登りが今回初めての彼は、出発早々大キジをヤラカシに雪溪のヘリへ向かう。身体はデカイが神経は細かいらしい。そんな事に気を取られてかルンゼ入口を通り越した我々は大きく左に回り込んだ尾根を登り出す。

急な斜面の木の根や枝をグリップにぐんぐんを高度を上げ、女性パーティのケツを追う。しばらくすると右下の沢から声が聞こえ、単独の男性が見えるので正規？のルートと判断して3名で登る。巨岩やスラブが次々と現われ時々イヤらしい場面もノーザイルでクリアーする。上部の草付きは急斜面でどこにでもルートが取れ2人が別々に登ったりする。

女性パーティは尾根で黄色い声でキャピキャピしながら歩いている。ガレ場と草付き、アァ～今日は何を楽しみに来たのでしょうか？



右に八ツ峰を見る…1峰にて

左右がスッパリの尾根（岩稜）からのパノラマは今までの愚痴がすっ飛んだ。Ⅱ峰の頭から2人はカメラ、カシャカシャでアル。登山家が今や写真家に変身。サァー唯一のアクセントⅡ峰の下降は赤信号3回待ち。今度はアルピニストに変身。35mの下降は下部で空中懸垂となるが今井君も楽しんでいる。単独のおじさんがザイル使用のお礼でミカン2個、ミニトマトも分けて頂きチョー助かりました。これがこれからのエネルギー源となりました。3日連続の晴天で尾根、岩場、沢もカラカラ、2人の身体もカラカラ、消耗が激しく水筒の中身も半分、山頂までの3ピッチがツラ～イ。

私…『今井君どう思う？山頂～池ノ谷の合流ルートは体力、時間、他を考えるに』

今井君…『私も実はツライのです。腹に力が入らずこの暑さですからねえ～』2人は談合し予定のルートでは合流時間に間に合わない判断し、Ⅱ峰のコルの右下のルンゼを降りることに決定する。今度は下山家に変身する。サァー下降となると今井君もルン、ルンでアル。滑り台状のガレ場をダマシ、ダマシ浮き石を避けながらの下降は神経を使う。『落！ラク～』の連呼が多くなり、場所によっては浮き石と共にズリ落ちる。落石は長次郎雪渓まで達せず、と判断したが？それは最後になって正解と判った。雪渓と岩場とのコンタクトラインを利用したり、アイゼン着用しピッケルも利用で後ろ向きに下降する場面も有り多種の技術が要求されてくる。悪場は間隔をつめ注意し合ながら、ノーザイルで下るのだがそれにしても悪い！。この下降は余り利用されてない為か目印も無く正確なルートファインディングが要求される。ピッチは短いが緊張する場面が次々と現われスリップすればバウンドしながらお陀仏である。

今井君…『鈴木さんこれ以上悪かったら登り返しましょう。もし足下から何十メートルもの垂壁でも出たらどうするんですか？。』

彼は私を脅迫じみた言葉と凄味の有る顔で迫ってくるのである。だが、でも、しかしである。ここでぶるってる様では、ACC-J茨城でも最長者として威厳がスタル、震える膝に力を入れ、ケツの穴をシメテ、曰く『今井ちゃん食料は一杯アルシィ～、ザイルも2本、ハーケンもシュリングもソコソコに有るシィ～、天気もピーカンダシィ～』この余裕のウラ付けが、実は無線連絡に有るのである。定時交信の際2人の現在地と下降ルートは本図さんが知っているのでイザとなれば、Help・meである。

『だからあ～心配しないでイイヨ～ん～。』『イヤ私は一人でも尾根まで登り返します。』スゴ味の表情は消え、覚悟の面相に成ってる。またも彼は私を脅迫するのでアル。私の経験からコルは松木沢のウメコバ沢支流のルンゼによく似ていると思った。傾斜が緩み大石がゴロゴロした沢状の所で、足下には長治郎雪渓が見える。やっぱり来るものがデタァ～。左右は、垂壁でV字のクビレタ所にチョックストーンが潜んで

いたのでアル。小石が蓄積して雨でも降れば大滝になるだろう20m程の垂壁の下降である。今井君は武者震いしている。こんな場所には残置ピン（いわゆる懸垂ピン）があるはずと2人で捜し、強度を確かめてシュリングも追加すれば完了である。念のため今井君を空身で下降させ後でリュックを降ろす。最後の私はザイルを左右に捌いて回収を容易にする。このルートは小雨が降ったら100%ヤメてください。2度目の交信で全員の位置が確認できたので本流に近い岩場がビューポイントと決定し2人は食料の軽量化を計る。パートナーは緊張が取れたのか又雪渓の下へ隠れた。報告は下痢気味との事。下流で水を飲んでいる人が気の毒に思える。暫くして本図さん古山さんの姿が見えコールした後アイゼンを着用して長次郎の雪渓に降りる。4名が合流し、テン場へ向かうが遅い私は今日もペケ助である。

我がパートナーは、今や経験豊富なアルピニストの表情でルンルン闊歩する。剣沢上部に太陽が現われ4名の背中を炙り沢風が暑さを探し返す夏山らしい情景にウットリする。テン場は数も増えカラフルに賑わっている。今井君は完登の握手もそこそこに小屋のキジ場に飛んでいった。

（鈴木 記）

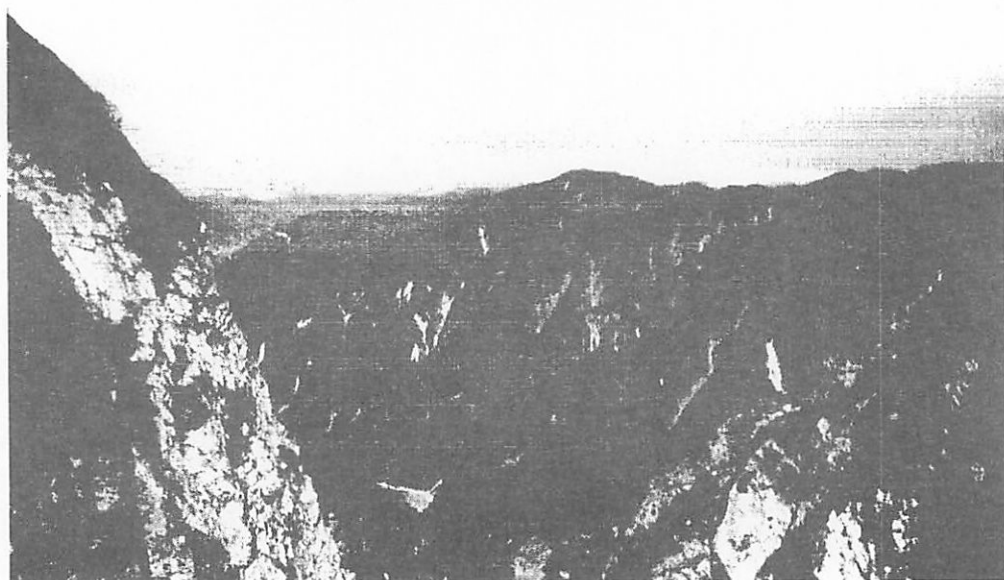


劔尾根

1994. 8. 14

パーティ L本図一統、古山正文

全員でチンネ登攀を終了し、池の谷乗越し直下へ下り、そこで明日の劔尾根登攀のため本図、古山パーティは三の窓へ下る。残るメンバーの内、澤田、佐藤パーティは八ツ峰から、鈴木、今井パーティは源次郎尾根からの劔岳を目指し集中登山を行う予定である。そして、ただ1名告君だけが涙の下山である。さて、我々は荷物をデポしておいた三の窓へ戻りツエルトの設営にかかる。石を積んだり枯れ枝を使ったりしていつものごとくきっちりと張り終える。と、隣のテントで我々の様子を眺めていた人が、「いやー、ポールを使わずによくこれだけきれいに張れるもんですねー。ポールを使っただけこんなにきれいにはれるもじゃないですよー。」と、非常に感心していた。水場はチンネの取り付け付近にあるのだが、好天続きのためだいぶ水量が減っていて、話によると1リットル汲むのに20分程かかるらしい。そこで、雪溪の下まで下って水場を捜す。運良く水場は見つかったが、テントに登り返すのに20分程か

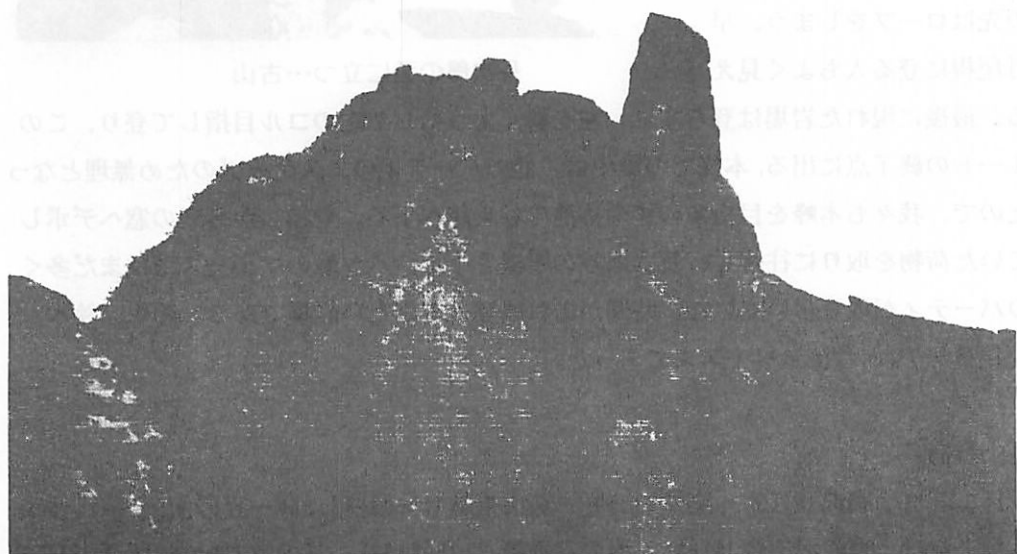


三の窓より富山湾を望む

かる。そこでビニールの袋に大量に水を入れる工夫をして2回の往復で済ます。夕方7時を過ぎてもチンネに取り付いているパーティがいて、ヘッドランプの明りがチラ

チラしている。そして、そのコールの声は次第に悲鳴に変わっていくようである。夕食は各自にジフーズ1袋および味噌汁付きのデラックスなものであり、食事担当の本図さんに感謝します。三の窓からの夕焼けや、富山平野や富山湾の夜景がすばらしい。満点の星空が明日の好天を約束していた。

4時起床。朝食を済ませ5時過ぎに出発。左岸側に主稜を見ながら池の谷を下る。はじめはガレ場で、崩れ落ちる岩とともに下る。途中から雪渓となり、運動靴に軽アイゼンを着ける。R10（10番目のルンゼ）に着き、ここから取り付く。ルンゼ上部の樹林帯直前の10数mが嫌らしかったが程なく稜線にでる。ここから踏み跡のしっかりした稜線を忠実にたどる。木登りを交えながら進むと、20m程の岩場がでてきて、ここでロープを出す。その後も木登りを交えながら進み、第一の岩場に着く。先行パーティが取り付いていて、順番待ちはあるがルートの様子がよくわかり、好都合。10m直登し右へ10mトラバースし、あぶみを使って乗越し、カンテに出てフェイスを直登する。取り付く前に、本図さんから「時間をかけずに登るようにしろや」と、指示が出る。そうなのだ、ルート図によるとこのルートは6-8時間かかるらしく、場合に寄ってはエスケープすることも考えていたのだ。岩場自体はハーケンが数多く打ってありランナーを取るのは楽である。灌木でビレーを取り本図さんを待つ。本図



剣尾根の核心部（門）

さんは あぶみをださずに乗越してきた。コンテで稜線をしばらく進み、“門”に着く。岩の形が、両側に高い部分がありまん中が低い部分となっていて、そのスカイラ

インがちょうど”凹”状になっている。まん中の部分に斜めに走るクラック沿いをあぶみを交えて登り、上の広場でピッチを切り、その上は左に回り込みルンゼを登る。しばらくコンテで稜線を進み、このルートの上部と下部とに分けるルンゼに着く。ここから3ピッチ、スタックで登り、岩場を通過。無線交信の時間が近いこともあり、また間近に尾根の終了点が見えてきた事もあり、暫しの休憩。他のパーティは途中でエスケープするらしい。この先はロープをしまう。早月尾根に登る人もよく見え



長次郎の頭に立つ…古山

る。最後に現れた岩場は登らずに、左を巻くようにして左のコル目指して登り、このルート of 終了点に出る。本峰での集中は、他のパーティのエスケープのため無理となったので、我々も本峰を目指すのをやめ池の谷乗越へ下る。乗越しから三の窓へデポしていた荷物を取りに往復し、長次郎谷の雪溪を下る。八ツ峰のフェースにはまだ多くのパーティが取り付いていた。時間があれば登ってみたい岩場である。途中、鈴木、今井パーティと合流しベースまで下った。

夏山合宿

8月13日 扇沢(5:59)－室堂(9:59)－別山乗越(13:08~13:36)－真砂沢出合(15:50)

8月14日 真砂沢出合(5:08)－池の谷乗越(8:25~8:57)－三の窓(10:08~10:30)－中央チムニー取付(10:40~10:53)－チンネの頭(13:36~16:18)－三の窓(16:50)

8月15日 三の窓(4:55)－R10取付(5:41~5:58)－コルE(6:22~6:26)－

コルC (7:47~ 8:20) - コルB (10:32) - 長次郎の頭 (12:25~12:45) -
池の谷乗越 (13:13~14:40) - 真 砂沢出合 (16:06)

8月16日 真 砂沢出合 (6:06) - ハシゴ谷乗越 (7:40) - 黒四ダム (12:30) -
扇沢 (12:59)

(古山 記)



八ツ峰縦走（中退）

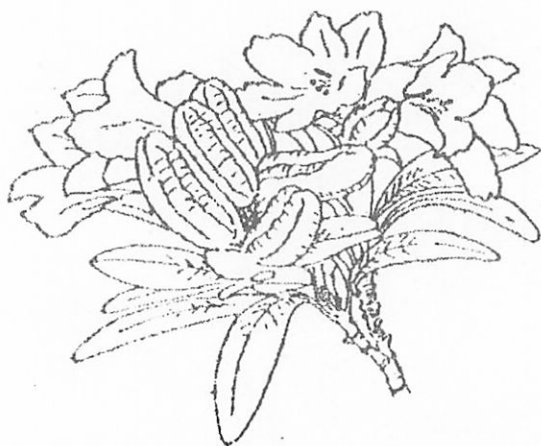
1994. 8. 15

パーティ L 佐藤文則、澤田仁

夏合宿の3日目、快晴であった。長次郎尾根の縦走パーティと一緒に長次郎雪渓を登る。途中で、二手に分かれて我々は右側の八ツ峰に取り付いた。

一・二の科尔まで登りには、予想以上に時間がかかった。2度ほどザイルを出した事もあり稜線に出たときは、かなり陽が高くなっていた。カンカン照りの下での稜線の登下降は厳しく、空腹も手伝って、自分はかなり消耗してしまった。五・六の科尔の上に来たのは11:00頃であり、このペースだと最後まで縦走するのは難しいと判断し、科尔からBCに戻ることにした。3回の懸垂下降で科尔に降り、ゆっくりと雪渓を下っていった。天気が高かっただけに、最後まで行けなかったのが残念だった。

（澤田 記）



アルペンローゼ

【なにの話】

今年の夏山合宿は久しぶりに劔岳に行った。天気はまずまずで、初日の午後、少し降られただけだった。真砂沢キャンプ場は昔と変わらない混雑ぶりだったし、クライマーもたくさんいたし、若者もけっこういたようだ。キャンプ場で気になった事がひとつあった。それはトイレである。水洗になっているのは非常にけっこうなのだが、あの下水はどこに流れていくのだろう。もしかしてあのまま劔沢に……!!え!!本当? うそだろう、そんなことはしないだろう。なんらかの処理はしていると思う。劔沢の水は飲料に適しないことは承知だが、いくらなんでもあのままだろう。いや! そのように信じたい。下流には大滝や大凹角壁を登ろうと、必死の思いで泳いでいるクライマーもいるのだ。もし俺が泳いでいる時、なにがプカプカ流れてきたらショック死しちゃうぜ。死なないまでも登攀意欲をなくし敗退するだろうよ。自分達もそのトイレを使ったんだから大きなこと言えないけど、頼むよ山小屋のおっちゃん、そのままだかんべんしてくれよな。もしそのままだったら、幕営料を倍とってもいいからなんとかしてちょうだい。

もう一つ。巻機山避難小屋のトイレだが、あれも使ってみてビックリしてしまった。小屋の後ろに農業用シートで囲われ、トイレになっているのはいいんだが、まったくのたれ流しだ。あまりひどすぎて目を覆いたくなる。数の中には、沢登りでルートをまちがえ、あそこに出て来る奴もいるだろう。その光景が目に見え。喉が渇いたと、その沢の水を飲みながら上がってきた沢屋は、最後に、なにの田圃で田の草をやらされるはめになるのだ。あ〜やだやだ、金をとってもいいから、なんとかしてもらいたいよ。

9月に唐沢岳幕岩に行った時、どうしてもそこでアンザイレンしなければならないテラスに、デンとなにが鎮座していたのだ。どうしても我慢ができないのはわかるが、壁中のテラスならいざしらず、取付きである。別な所を探すとか、なんとかもうちょっと考えてよクライマーさん。おかげさまでそこで食べようとした行動食が喉を通らず、ダイエットの役にはたったがね。もうひとつ、幕岩に向かうアプローチ道のど真ん中にドデンと、どでかいのが鎮座してた。いくらなんでもひどすぎると思わないかい。周りはヤブで、なにをする所はいくらでもあると思うがね。その方は2度と来るつもりがないのかも知れないが、たのむから場所を考えてくれよな。

ついでにこれも書きちゃお。昔々、屏風岩東稜を登った時のことだ。それはそれは出来立てのホヤホヤのなにで、ルートをペインティングされていたのだ。ここにボル

トラダーがありますよ、と言わんばかりにだ。多分、登攀中に我慢ができなくなり、アブミに乗ったまま用をたしたんだろうよ。じつに器用な方だが、後から行った我々はたまったものじゃない。そのホヤホヤのなにでザイル、アブミ、カラビナ、そしてお手々までペインティングされてしまい、その時のパートナーの中野融ちゃんとは、くさ〜い仲になってしまったわけ。その後、融ちゃんとは海外まで山行を共にしたが、二人の食事メニューにカレーライスがのることはなかったんだ。でも、日本のとは姿形のちがうインドやパキスタンのカレーは食ったけどね。おそらく融ちゃんは天国でもカレーライスは食べていないと思うよ。

これまた昔々のはなし。ヒンズーラジに行った時、ラワルピンディ滞在中、体をこわし下痢が何日も続いたんだ。これは、ほとんどの日本人が経験しなければならない試練だが、私の場合、山に入ってからもしばらく続いていた。隊員の会話の中で、最近体の調子が悪い証拠に、なにが柔らかい、という話があった。ある日、K君が私を呼んだ。「Mさん、Mさん、すごいものがありますよ、これこれ」といってK君が指さした先には、それはそれはとてもご立派な、なにがあったのです。色は黄金色ではなく、黒光りしていて、特大のカリントーのようで、とてもたくましくさえ見えたのです。それを作り上げた方はアクバル（コック）でした。そのときばかりは、アクバルがうらやましくさえ思えたのです。その場所は、私達が荷上げで毎日通るたびに立ち止まり、黙ってそれを見つめ、ア〜アとため息をつくのでした。

後日、土石流が発生し、ベースキャンプと装備が流されてしまいました。その中にトイレットペーパーもありました。私達が途方に暮れている時、コックとリエゾンオフィサーはこう言ったのです。「なにも困ることはないではないか。石、雪、氷がいくらでもあるじゃないか」と。なるほど彼らはこういう物で日夜鍛えているんだ。納得した隊員達はトレーニングを重ね、今ではトイレットペーパーなんぞなくたって平気のへいぞ。石、雪、氷があればどこでもOKにまで成長したのであります。

以上、今までの経験から私ことMは、なにを見れば、この物の製造者は太っているか痩せているか、色は黒いか白いか、背は高いか低い、男か女か、歳はいくつか、体のどこが悪い、はては岩登りが上手か下手か、までわかるようになったのであります。会員諸君、もし体の調子が悪いとか、岩登りが上手にならないとか、なにか悩み事でもあったら、そこいらの病院にいくのはやめたまえ。私のところに、なにを持ってくれば無料で診断してあげますぞ。

又、最近、なにによる環境破壊を真剣に考えております。会員のなかで賛同する者、集まってくれや。山で、なにを持ち帰る運動を展開しようじゃあ〜りませんか。ハイ

(M)

穂高岳屏風岩東稜

1994. 8. 19~21

パーティ L 中居康展、佐藤文則

今回の夏休み後半は岩登りということで古山さんと話をしていたが、その話に乗ってきた二人、つまり高田さんと佐藤ちゃんも日程を合わせてくるということで、気付いてみればその標的は屏風岩ということになっていた。8月18日仕事を無理矢理終わらせて高田さんの車に乗り込みいざ出発。真夜中の上信越道をぶっとぼし、沢渡の駐車場に着いたのが夜中の3時だった。軽くビールを飲んで一寝入りすると早くも日は中天に高く、盆を過ぎたとはいえ真夏の日差しがざらざらと照りつけていた。

どうせ今日は横尾までだと適当に準備を始め、上高地行きのバスに乗り込む。上高地は相変わらず観光地で我々のほうが場にそぐわない。明神も上は雲に隠れているようでよく見えないが、天気としてはまずまずの様でだらだらと出発した。明神の手前で迎えに来た佐藤ちゃんに合流する。このところ日中は比較的天気の良いのだが夕方になると激しい雷雨になるという。徳沢に着いて一休みしていると、パラパラと雨が降りだし、やがて次第に激しさをましてきた。こんな入山初日で大雨かよ～なんて思ったが3時間ほどするとぴたりと雨はやんだ。雨上がりの道をひたすら横尾まで歩く。屏風岩が霧の中に聳えている。とりあえずはテント場で一休みして取り付きの偵察に行く。高田さんの話では川の流れが結構あるとのことだったが水は殆ど流れておらず、靴は脱がなくても渡渉出来そうだった。踏み跡ははっきりしており、1ルンゼの押し出しに続いている。テントに帰ると3人はすでにビールでできあがっており、遅ればせながら酒盛りに参加した。夕方より激しい雨となり翌日の天気が気になったが、とにかく明日に備えてシュラフに潜り込んだ。

雨は夜中中ばらばらとテントをたたいていた。朝三時起床。外は結構な雨降り。こりゃダメだななどと言いながらラーメンをつくる。雨はちっとも収まる様子がなく、そのうち雨男は中居だななどと話が変わってきた。そんな馬鹿な！俺はワングルでは晴れ男だったはずだ。しかしそういえば五十沢の時も雨降りてビパークする羽目になったな～とどうも旗色が悪い。朝飯の後もとりあえず天気待ちでごろごろしていると、何といつの間にやら外は晴れているではないか。あわててガチャ具をザックに放り込み出発する。

岩小屋より1ルンゼを詰める。屏風岩東壁が次第にその全貌を表わす。T4尾根の取り付きでガチャ具一式を着けて登攀開始だ。準備中に他のパーティがやってくる。

何やら東京YCCの連中だそうで、先月の五十沢といい今回といい物好きも決まっているんだと思った。T4尾根も立派な岩登りでアプローチとはとてもいえない。4級2ピッチがいきなり始まり、T4尾根だけで3ピッチザイルを出した。その後も少々嫌らしいチムニーがあったりで初っぱなから全く気が抜けない。高田、古山コンビは早速雲稜ルートに取り付いており、我々も東稜の取り付けに向かう。

まず1ピッチ目のトップを引かせてもらう。小ハングを越してバンドでビレイ。佐藤ちゃんが次の40メートルいっぱい人工を登る。高田、古山パーティは早くも扇岩に達しており、こちらをコールする声が聞こえる。そうこうしているうちにいきなりガスが濃くなったと思ったら雨になり、たちまち岩肌はびしょびしょになった。いくら人工主体のルートとはいえ、こんな状況では登る意欲も萎える。特に人工からフリーへ移るところは人工慣れしていない自分にとって辛かった。雨の切れ間をぬって淡々とピッチを進める。晴れていれば素晴らしい高度感のあるルートだろうが、こんな状況では緊張感を楽しむ余裕もなく、ただひたすら目の前のボルトを追って行くしかなかった。(全くちゃんとトレーニングしていればなあ～)最後のA1, 3級の岩場を抜ける時はもうばてばてだった。更にザイルいっぱい踏み跡を進み、ようやく安全地帯に着いたかなというところでザイルを解く。いつの間にやらもう4時半。高田、古山パーティは屏風の頭で待っているとの事で、どうやら1時間半程遅れをとっているようだ。 天気の良いせいもあるだろうか急速に宵闇が迫ってくる。どうもシャリバテらしく、行動食と本図さんから託された毒をあおると少々元気が出てきた。高田、古山パーティは早々に下山しており、屏風の頭では休憩も取らず黙々と我々も下山する。涸沢に向かう一般道に出てやっと一息。しかしこの先横尾までは果てしなく遠い。涸沢の明かりが遠くに灯る。途中からヘッドランプをともし涸沢に着いたが8時。初めての涸沢と言っても真っ暗で何も見えない。後は横尾への道をただひたすら歩くだけだ。道はうって変わって歩きやすくなった。沢身まで下降して対岸に渡る橋があるらしいのだがさっぱり分らない。(後で佐藤ちゃんが、あの橋流されちゃったんですか？と言って大うけしてしまった。)結局横尾に辿り着いたのは9時半。何はともあれ無事完登したのだ。ビールとジフーズで豪華な晩餐、夜遅くまで話が弾んだ。

下山日は朝から篠突く雨。合羽を来てひたすら上高地を目指す。下山して分かった事だが丁度入山日頃より寒気が流入して下界でも荒れ模様だったとの事。すざましい雷雨で川の様になった50号をすっ飛ばし茨城県に帰り着いた。今回も何とか完登でき、この夏休みは充実したものとなった。

(中居 記)

北アルプス屏風岩―雲稜ルート

1994. 8. 19～21

パーティ L 高田暢年、古山正文

今年の夏はとにかく暑かった。連日連夜の猛暑、熱帯夜、水不足などと昨年の冷夏が嘘のようであった。つい数日前に行われた夏合宿も大変好天に恵まれたとの事。さぞかし屏風岩も好天の中、大変暑い事が予測される。喉も乾くだろうと言うことで水筒は2ℓを持ち上げた。ところが現実是我々の予測を大いに裏切ってくれた。

8/18夜9時半頃つくばを出発。佐藤は夏合宿終了後そのままむこうに残り、ひと足先に横尾にテントを張って待っている。今回は私と古山さんと雲稜ルート、佐藤と中居で東稜ルートを登ることにする。沢渡大橋の駐車場に2時着、お盆シーズンは過ぎたとはいえ車の数はまだまだ多い。早速車の外に銀マットを敷いて一杯やる。どうせ初日は横尾までだと思えば気が緩んでついつい寝るのが遅くなってしまう。朝急いで出発する必要もないので、ゆっくり寝ようと思ったが暑くて7時頃には目がさめた。天気は快晴、日差しがさすように照りつける、今日もうまいビールが飲めそうだ。バスで上高地まで行き、そこから横尾まで約3時間の行程である。途中明神まで佐藤が迎えに来てくれた。佐藤にここ数日の横尾付近の天気を聞くと、昼間は快晴だが夕方になると雷を伴う強い夕立が連日発生しているとの事。朝暗い内に出て夕方4時位迄には戻ってこない夕立にあう危険性が高い、などと話していると徳沢で雨が降りだした。時間はまだ昼前である。夕立にしては早すぎる。徳沢ヒュッテの軒下で雨宿りをするはめになった、雨は中々止まず、結局3時間位足止めを食った。今朝までの快晴、猛暑は何処に行ったのだろうか？寒くてビールより熱燗が欲しくなった。明日は大丈夫だろうか、不安が脳裏を過る。このころより中居に対し「なかい～、おまえな～、あめおとこじゃね～のか～」「そういえば、〇×山に行った時も天気悪かったけどあの時も中居がいたよな～」「明日登れなかったら今回の交通費と食費、全部中居が払えよ～」などといじめが集中しだした。（いじめといってもけして陰湿なものではなく、中居の場合いじめられる事に多少の喜びを感じているようだ）

8/20不安は的中、雨が降っている。とりあえず朝飯を食べて天気の回復を待つ。明るくなってきたが、屏風の方もガスがかかっており雨は止まない。又ここで中居に対し「なかい～、ど～してくれんだよ～」「今度来る時は中居に内緒でこようぜ」な

どと中居を喜ばせながら半ば諦めかけた時、ふと外を見ると雨が止み青空がのぞいているではないか、このまま天気は回復するのか、又雨が降り出すかは不明だがとりあえず出掛けてみることにする。7時30分出発、充分明るい内に戻って来れる時間である。

岩小屋跡からールンゼ押し出しへは飛び石づたいに渡っていく。以前来た時は飛び石づたいに渡って行けず、裸足になって徒渉した覚えがある。これも今年の猛暑の影響だろうかと思われる。ールンゼ押し出しに入ってから30分位でT4尾根取り付きに着く。下から樹林の中を登ってきて、いきなり樹林がひらけ目の前に屏風岩が現れる。下から見上げるのとは違い中々圧巻である。一応T4まではアプローチではあるが、ピッチグレードでIV級のルートである。ザイルをだしこより登攀開始となる。T4までは両パーティ共一緒なので、古山さんがトップで後の3人はザイルにつながっていく。我々はT4より雲稜ルートにとりつく。佐藤、中居パーティはこよりT3へと踏み跡をトラバースして行く。8時30分登攀開始、まず古山さんがトップで行く。ルート図では50mVジェードル、しかし殆どのパーティはここを2ピッチで登っているみたいで30m位の所にいいビレイポイントがある。ルート図には「かつては人工登攀の代表的ルートであったが、現在は常識的にその殆どがフリーで登られている」とのことだが我々は非常識にも人工で確実に登らせて頂きました。3ピッチ目の40mV+フェースを登り有名な？扇岩テラスに出る。こよりこのルートの核心部35mIV、A1スラブが始まる。つるべで登っているの、順番からいって私がトップとなる。（後で古山さんから一番美味しい所を高田さんに取られたと言われたが、どーもごちそうさまでした。）フリーだと5.11であるが当然我々は人工で行く。ボルトラダーを単純なアプミのかけかえで登るが、殆どのボルトのリングが外れておりシュリングが結びつけてある。念の為に3mmのシュリングを準備していったがかけかえる必要はなかった。このピッチより恐れていた雨がポツポツ降り出した。そんな強い降りではないが、カッパを着てなかったので体が一気に冷えて寒くなった。セカンドで登って来る古山さんをビレイしてる間も上のハングから雫がポタポタ落ちてきて寒くしょうがなかった。古山さんの到着を待って二人ともカッパを着て一息つく。ここまで来たら意地でも上にぬけるしかない。5ピッチ目は40mVバンド〜ールンゼである。ここのトラバースでの事故が多いと聞くが、確かにややかぶり気味なのでとても嫌らしく感じた。6ピッチ目は東壁ルンゼに入り、ルンゼ状スラブを登る。こより傾斜はぐっと落ちフリーとなる。ルンゼを雨水が流れ岩登りというより沢登りである。しかし谷川なんかの岩と違い濡れてもフリクションは結構きいた。このあ

と3ピッチルンゼを登り草付きに入り登攀終了となる。靴を履き替え、行動食を食べながらひと休みすることにする。喉は全然乾いてないため2ℓの水は殆ど残っている。今回の水筒は1ℓで充分であったようだ。無線で東稜パーティと連絡をとると、むこうも最終ピッチにとりかかっているようである。屏風の頭で合流することにし、我々は先に屏風の頭へと向かう。途中ビバークの跡が数多くある。1時間くらいで屏風の頭に着くが、このころより雷が鳴りだしたので先に下ることにする。涸沢あたりよりヘッドランプを出し横尾まで一気に下る。又今回も明るいうちにテントに戻れなかった。横尾山荘に21時少し前に着いた。まだ小屋は開いていたので急いでビールを買い込む。21時半頃東稜パーティも無事戻ってきた。早速乾杯をし登頂祝いをした。いつもながら一番幸せな時である。中居の顔も満身に満ち溢れた顔をしている。登れば登ったで又中居いじめが始まる。高田「いや～しかしよ～登れて良かったよな～、これもひとえに中居のおかげだよな！」 中居「いえいえ、そんなことはありませんよ、高田さんのおかげですよ」 高田「あったりめ～だろ、図にのんじゃね～ぞコノ～」などとほのぼのとした会話が夜更けまで続き大変楽しい一時を過ごした。

8/21天気は相変わらず曇っており屏風にはガスがかかっている。上高地までゆくりと下る。次に上高地を訪れるのはどこを登りに行く時だろうか？もしかしたら河童橋で写真だけ撮って帰っていく観光客の集団だったりして。帰りはいつものように鹿教湯温泉に入ってから帰った。

なかい～又一緒に山いこうな～。楽しみにしてるよ～。

(高田 記)



劔岳周遊山行

1994. 8. 27～30

パーティ L 生井一男、村上晴美

青年海外協力隊の隊員として、今年の暮れには日本を離れてしまう。そして少なくとも2年間は日本に帰って来れない。だから、最後の山行として、山に興味を持ったあの劔岳にどうしても行きたい…。もうしばらく日本の山には登れないから、だから最後に劔岳を見るだけでもいいから行きたい！。というそんな村上の一途な気持ちというか、その願いに、このフェミニストの私が答えない訳がなく、そんな訳でこの山行は生まれた。（私は女の涙とか、頼みには弱いのかもね…。）

山行計画に際して、村上の意向を聞くと、劔岳も見たいし、又仙人池にも行きたい（ここからの劔も見たい）というのであった。それを行くのには4日はかかるだろう？でも私は、盆休みの後で有給休暇が取れるかな～と、ちょっと迷ってたが、日頃の業務態度が良いせいかな？難なく休みを頂いた。

これで、日数はどうにかなった。後は装備とルート選択である。2人という事を考えて極力荷物を軽くする為、小屋泊りとし機動力をよくした。ルートは、扇沢～室堂～劔御前小屋～別山～劔沢小屋（泊）～真砂沢小屋～二股～仙人池ヒュッテ（泊）～二股～真砂沢小屋（泊）～ハシゴ谷乗越～内蔵助平～内蔵助谷出合～黒部ダム～扇沢と決まり、いざ劔へ向け、レッツ・ゴー！

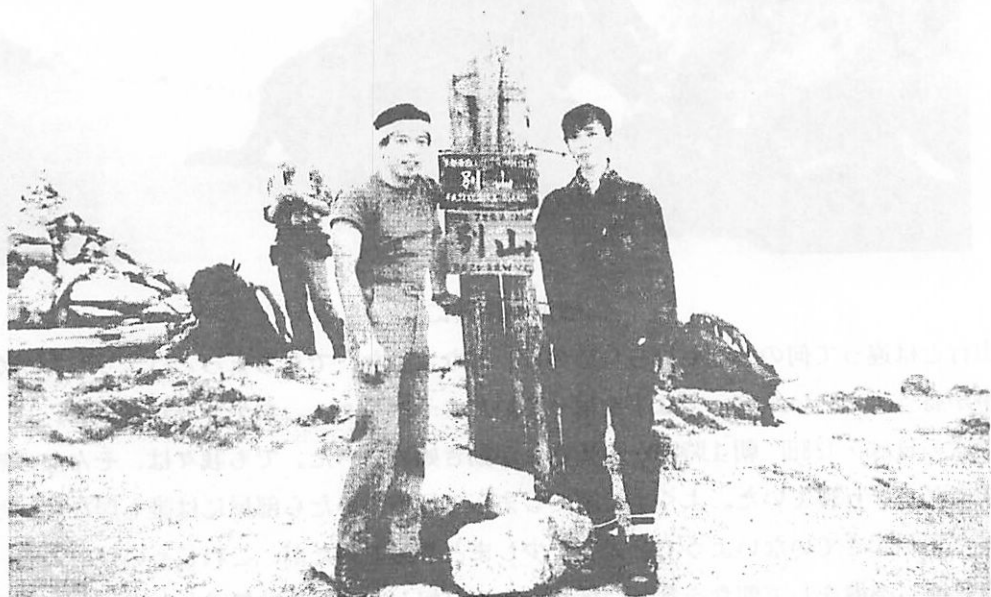
26日、土浦協同病院駐車場に21時集合、21：30出発。常磐～中央高速とプツ飛ばして、扇沢に到着したのは午前2時45分だった。そして車の中で、ちょっとアルコールを飲みまして、その後、数時間車の中で仮眠を取った。

翌朝、8時00分のトロリーバスに乗り、ケーブルカー、ロープウェイ、トンネルバスと乗り継いで、室堂に10：00到着。ミクリガ池が、眼下に見える室堂平で休憩しお茶にする。天気は最高！谷から吹いてくる風は心地よく、景色も最高である。目の前に劔岳が見え、右に雄山、左手奥に奥大日岳、そしてこれから行く劔御前小屋もよく見える。日頃の心がけがいいのだろう。私はここぞという時には必ず天気には恵まれている。そう、ヨーロッパに行った時も終日天気には恵まれた。

まずミクリガ池まで下降して、一気に登りになる。時間的には2時間位で着くのでいつもの山行（某Mさん等との山行）に比べれば、余裕の山行である。それでも結構大汗をかいた。私と村上は、谷からの心地よい風を友とし、気持ち良い登りを劔御前

小屋まで、十分に楽しんだ。劔御前小屋到着…13:00。ここで、軽く行動食を食べながら、回りの景色を堪能していた。眼下には今日泊まる予定の劔沢小屋が見える。もう夏も終わりなのに結構の人がいた。(よく考えたら今日は土曜日なので皆休みなのである)

十分に休憩したので、今回これ一つかも知れないピークハントの別山登頂に向かう。途中、稜線の這松帯の所で、村上が『一度これをやってみたかったの』と辺りを見回し、何と這松をベッドにし、仰向けに横になった。『うわ〜い!』とまるで子供だ。楽しそうだったが、私には這松が可哀想で出来なかった。そんな冗談をしながら別山山頂に到着。登頂写真をとったり、ここでも十分に休憩した。村上は、劔の山々を目に焼き付けているようだった。



別山山頂にて…生井、村上

そして今宵の宿である、劔沢小屋に降りる為に別山を後にした。そして劔沢小屋にpm4:20到着した。早速チェックインを済ませる。6人部屋になり、荷物を運ぶ。夕食まで時間が有るので、2人で外のパルコニーでコーヒーを飲みながら、劔岳にカメラを構える。ガスが湧いてきてうまく撮れない。そうこうしてるうちに日も落ちてきて辺りが幻想の世界に変わる。私はこの時間が好きだ。有史以来こんなことは繰り返されてきたのだと思うが、今この日この時間を自分の時間として感じられるという喜び、過去から未来へと続く、その一瞬に今居るという実感が心の奥より込み上げてくる。そんな感じが好きだから山をやっているんだと思う。私は本当は山に登るのが

好きではなく、こんな一瞬に触れられるのが好きなんじゃないかなと最近思うようになってきた。夕食の時間になったので、小屋に入り夕食を取る。夕食後、談話室で本を読み時間をつぶす。そして消灯。私はこんな小屋泊りは始めてである。いつもの



剣沢小屋前にて

山行とは違って何の心配もいらぬのは、楽なような、でもちょっとはスリリングな事が有ってもいいかなってな事を思っていた。それじゃあ、おやすみなさい…。

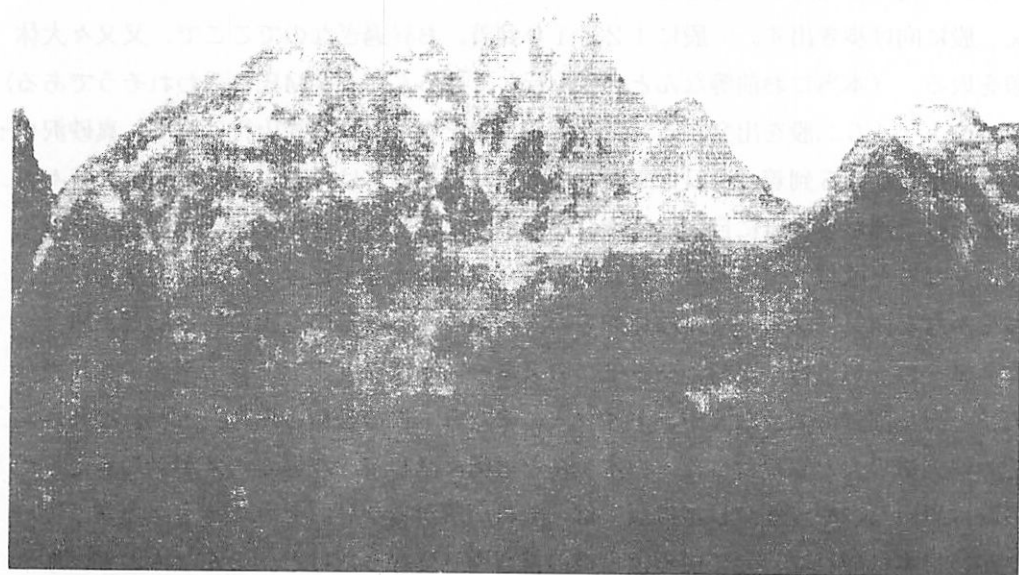
次の日は、(28日) 朝4時頃から皆さんが動き始めていた。でも我々は、そんなの無視でグウグウ寝ていた。よくよく寝てしまつて気がついたら部屋には誰も居なかった。まだ頭が起きていないようで2人して少しまどろんでいたが、これじゃいけないと一念復帰し準備をして朝食を食べに行く。すると何とも朝食は無くなっていた。食堂のおねえさんに言う『あれえ、まだ食べてなかったんですか、それじゃ今すぐ用意しますね。ちょっと待っていてくださいね』…『私たちが遅いのがいけないんです。無くなつても仕方ないですね』と私。今6時半過ぎだもんな、こんな時間まで居る登山者はいないよなあ。完全に山なめていると一人思う俺でした。

そうこうして、剣沢小屋を7:45出発。今日の行程は、仙人池ヒュッテだから結構あるが、それでも余裕である。剣沢雪渓を下り、一服剣、前剣、剣岳、と展望しつつ下るのは中々楽しい。私もここは始めてなので、本当に良かった。途中景色のいい所でお茶にしたりして、のんびりと剣沢雪渓を真砂沢ロッジに下っていく。ロッジでは休まず、二股とハシゴ谷乗越の分岐で休憩する。まだまだ天気は良好である。あま

り人とも会わず、剣を十分に楽しめた感じで良かった。『それじゃあもう少し頑張ろう』と二股に向け出発する。こんなのんびり山行でもどうにか二股に11:50に到着した。ここで休憩し、お昼ご飯にする。ここには吊橋が架かっていて、その奥に三の窓雪溪が見え、又々景色は良い。ここからは、仙人池までの登りになるが、これが結構きつかった。又しても大汗登行である。当然2人とも無口になる。そうこうして、尾根を登り詰めた辺りから雨が降ってきた。もう少しなのに…と俺は雨具を着るが、村上是降りが収まるといい、着ないでとことこ先に行った。仙人池ヒュッテが見える下りで、村上是待っていた。そこから2人で下って行き、仙人池ヒュッテに午後3時25分に到着した。チェックインをして部屋を取ろうとした時、小屋のおばちゃんが気を利かせたのか、4畳半の2人部屋にしてくれた。どうもおばちゃんは我々2人を夫婦だと思ったのだろう。まあそう見えても仕方ないと思うけどね。

ここは、おばちゃんとおじちゃんとでやっているようで、すごくアットホーム的な感じであった。泊り客も12~3人はいたかなあ。夕飯の時も、おばちゃんはちゃんと給仕をしてくれて、本当に人懐っこい楽しいおばちゃんだった。またここは風呂に入れたので、汗を流せてとてもよかった。ふと外を見ると雨が強くなっていた。

ここ仙人池から見る剣の山々はとてもいい。まるで異国の山を見ているような景色だった。又仙人池に写る剣の山も格別である。(まるで、ヨーロッパのドロミテの山々を見ている様な錯覚に陥った。又行きたいなあ…ヨーロッパに) 雨も夜には上がり、



仙人池から見る剣岳

夜空と夜の剣を見に仙人池に行ってみる。夜空一杯に星が綺麗だった。夏の大三角形、天の川、カシオペア、大熊座、小熊座と見えて楽しい一時でした。しばらくして部屋に戻り、蒲団を敷いて寝る準備をする。消灯の時間まで本を読みリラックスしていた。そして消灯、就寝する。

29日、朝おばちゃんに起こされた。『朝食ですよ。お客さん、起きてますか』と元気のいい声が聞こえる。もう少し寝ていたい、覚悟を決め起き上がると、村上也起きたく、交互に歯を磨きに行き、その後一緒に朝食を食べに行く。食堂に行くともう皆さん食べていた。朝食後出立の準備をし、おばちゃんとおじちゃんに挨拶をして仙人ヒュッテを7:10に出発する。来た道に戻るもの能が無いので、池の平小屋経由～池の平～二股のコースを下る事にする。池の平小屋に8:30到着。ここ池の平は綺麗なお花畑になっていてとても綺麗でした。又、チンネがよく見えるし、天気は良いので池の平小屋で、又休憩してしまった。小屋の前で、すわって村上が何の気なしに『ああ、お腹すいたよ』と俺に冗談の様に言ったのを、小屋の所で1人で、パイナップルの缶詰を食べていた人がいて、聞こえたらしく『これいかがですか』と差し出してくれた。ちょっとバツが悪かったが快く頂いた。周りの景色を見てみると、チンネの方から、『ビレー解除!』と言う声が聞こえルートは分からなかったが、頑張ってるなぁと感じた。ここからの下降は急な下りになっていた。一気に三の窓からの雪渓まで降りてしまう。雪渓が切れた所で又休息してしまった。またまたお茶にする。(何なんだおまえ等と言われそうで恐いが、これがまたいいんだなぁ)そして又二股に向け歩き出す。二股に12:10到着。お昼過ぎなのでここで、又々々大休憩を取る。(本当にお前等なんという山行しているんだと某M氏に言われそうである)

pm1:45二股を出発する。又々のんびりというより冗談山行は続く。真砂沢ロジにpm2:35到着。今日は平日なので、何と泊り客は単独が2人、夫婦と我々の6人だけで部屋を十分に自由に使い、小屋泊りがとても好きになった。(ピーク時にはこんなことは言ってもらえないけど)知らない同士なんだけど、山の話なんかで、和やかな雰囲気になる。こんな見知らぬ人と知り合いなるのも山のいい所だと思う。俺もヨーロッパに行った時、シャモニのスキーステーションで、カナダ人、ベルギー人、と海兵部隊のような連中、ドイツ人、また日本人の松田さん、白木君、宇井さん、その他大勢の人と知り合った。白木くんとも種々話して、だいぶ考えが変わったとその時は思った。やっぱり日本に居ては、それが解からない。そうさそうさと言っていたが、日本に帰れば、元に戻るよと彼の言う通りになったけど。そんな人とも、もう2度と会うこともないだろうけど、心の中に良い思い出となって生き続けている。見

知らぬ人たちと出会い、彼らに触れ影響され、種々な事を学ぶことが出来ると思う。本当は自分は山でなく、世界をまわって見てみたい。そう椎名誠や、落合信彦のように生きてみたいね…と話が逸れちゃったネ。元に戻しましょう。

30日am6:30真砂沢ロッジ出発。今日で剣ともお別れです。ハシゴ谷乗越はきつい登り、でもそんなに辛く感じ無かった。それが今回のノンビリ山行の良いところだろう。ハシゴ谷乗越を過ぎ、内蔵助平を9:45、そして内蔵助谷出合に12:00に着いた。ここでお昼にする。村上は下の廊下を見るのは初めてで、かなり気に入った様だ。私は下の廊下は、幻の大滝をやり春、夏と入っている。それに去年は、上の廊下に行っているし、もう来ることもないかな。

内蔵助谷出合を13:00に出発する。今回のノンビリ山行も後は黒部ダムまでで、終盤にさしかかった。村上の頼みで来たと書いたけど20才の頃ここに来たかった。今までなかなかその機会が無く、ようやく来られたのは、一重に村上というパートナーがいたお陰だと思う。特に仙人池には一度行きたかったもので、本当によかった。そんなことを考えながら黒部ダムに14:30到着する。そして扇沢に戻り、いつもの薬師の湯に浸かり汗を落として、茨城に向け車を走らせた。

最後に村上へ。ケニヤに行っても俺達ACC-J茨城の事を忘れず、そして挫けるようなときは、風を友とした剣御前小屋までの登り、又は、仙人池から見た剣岳を思い出して乗り切ってください。そして2年後、元気な顔で、2年間の思い出を我々に語ってください。それでは、2年後楽しみに…それまで暫しのさよなら。

コースタイム

8/26 協同病院(21:30) - 扇沢(2:45)

8/27 扇沢(8:00) - 室堂(10:00~10:20) - 別山乗越(13:30~14:00) -
別山山頂(14:35~15:30) - 剣沢小屋(16:20)

8/28 剣沢小屋(7:45) - 真砂沢ロッジ(10:45) - 二股(11:50~13:00) -
仙人池ヒュッテ(15:24)

8/29 仙人池ヒュッテ(7:10) - 池の平小屋(8:30~10:10) - 二股(12:10~13:45)
真砂沢ロッジ(14:35)

8/30 真砂沢ロッジ(6:30) - ハシゴ谷乗越(8:40) - 内蔵助平(9:45) -
内蔵助谷出合(12:00~13:00) - 黒部ダム(14:30)

(生井 記)

五十沢川本流遡行（上部永松沢）

1994. 7. 29～31 下部遡行

パーティ L本図一統、古山正文、中居康展

1994. 9. 1～4 上部遡行

パーティ L本図一統、古山正文

だいぶ前、小泉共司氏が「岩と雪」に初下降した記録を発表した。それ以来この沢に興味をもっていたが、悲しいかな当会は岩登りのクラブ。パートナーがいるはずもなし。よし、それならば単独で下降してみようとも思ったりしていた。それが行ってもよいというパートナーが現れたのである。

7月29日。早朝、五十沢キャンプ場に着く。一般車通行禁止の立て札のある林道を入ってみると登山口に駐車場があった。しかし、ちょっと気が引けたのでキャンプ場まで戻って仮眠する。出発準備をしていると早速駐車料金500円をとられた。地図を見ると登山道は左岸高い所にある。これはきっと不動の滝より下にも滝やゴルジュがあるにちがいない、というわけで忠実に遡行するため、すぐに入渓する。しかし、



自然の不思議（石橋）

巨岩の乗越しに苦労するだけで何もない。大ビト沢出合を右岸から巻こうとしたら、偶然、登山道を見つけた。左岸上部に道があることは知っていたが、右岸の道は知ら

なかった。いいかげん嫌気がさしていた我々はこの道を辿ることにした。結局、不動の滝直下に小さなゴルジュがあるだけだった。不動の滝下に荷物をデポし、下部ゴルジュの遡行にかかる。不動の滝は残置支点がなく、左岸から巻き、20mの懸垂下降。次の滝は泳いで右壁を登る。この辺は明るくとても綺麗だ。右に曲がると小さな河原があり、岩魚が何尾も悠々と泳いでいる。小泉氏の記録では岩魚は不動の滝下だと書いてあったが上にもいるようだ。すぐ左に曲がり15m泳ぐと、登れない15mCS滝にでる。中居トップで左岸にハーケンを2本打つも、人工登攀になれていない彼は時間がかかる。岩登りは上手なのだがうまくいかない。ハーケン技術とかルートファインディングは、いくらゲレンデを登っても身につかない。本番を数多くこなさなければだめだ。さらに本番はスピードも大切だ。スピードが遅いとそれだけ危険と遭遇する機会も多くなる。ここの残置ボルトは腐食が著しく使用出来ない物もある。ここでトップを古山と交代する。40m登り、ブッシュを支点に懸垂下降20mで落口に降りる。この上は泳ぎ2回で小滝を2つ越し、ショルダーで4m滝を登ると水流は殆どなくなり取水口に着く。時間があるので上部のルート仕事を少々行う。古山トップで最初の2m滝の釜を15m泳ぎ、リスにアイスパイルのピックをひっかけ体を固定し、ハーケンを打つ。ここでトップを交代し、本図が行く。上の残置ボルトはとても遠くてとどかない。思案の末、アイスハンマーを引っ掛けようと飛びつく。1回目は失敗し、水の中にザンブリコ。2回目に成功する。アブミを残置し、不動の滝下に戻る。(尚、この滝は、9月1日取水口から見たところ、取水口付近が砂利で埋まり、水位が上がったため50cmの滝に変化していた。この状態なら苦労せずに通過できるであろう) ビバークは焚火ができたものの、岩魚は釣れなかった。

30日。本日帰る予定で登攀用具と行動食だけを持って取水口から入渓する。最初の滝は昨日残置したアブミを使って通過。その上の小滝を越し、20m2ピッチ泳ぐと、次の5m滝は登れず、古山トップで左岸のボルトラダーを辿る。途中でボルトラダーから外れ、一段上のバンドをトラバースする。ボルトはバンドの2~3m下を連打でトラバースし、さらに連打で斜下降している。ここで私は考えてしまった。なぜ先駆者はこのような時間のかかるルートを取ったのだろうと。恐らくその当時このバンドは草付の下に隠れていたのかもしれないと勝手に結論をだす。ハングの下までトラバースすると残置ボルトがあった。懸垂支点にするにはちょっと不安があったのでボルトを1本打ち加える。そのとき、なぜかキリが折れてしまった。25mの懸垂下降で滝上に降り立った時、そのキリを忘れたことに気がついた。沢に鉄屑を捨てたようであつと心にとどめた。20m泳ぎ小滝を越し、又20m泳ぐ。右に直角に

曲がると夫婦滝が現れる。左岸ルートの残置ボルトはないので、右岸の垂直ルンゼにルートをとるほかないようだ。結果論だが、ここは泳いで左岸に取付いてみるべきだった。今でも心残りでしょうがない。右岸の垂直ルンゼに古山が取付くが、悪いとの事なので本図と交代する。ボルト1本、ハーケン3本でこれを越し、右のスラブに移る。Ⅲ～Ⅳ位のスラブを2ピッチ登る。その時、後続パーティが現れ、彼らは左岸ルートに取付く。しかし彼らはハーケンもボルトも打っている様子はなく、残置があったのかと良くみていると、フレンズを使っているようだ。再び古山トップでブッシュ帯を右にトラバースしようとするも、ルートがわからないと言う。もともとここにはルートなどないのだ。古山の所まで行き、また本図がトップに立ち、登り過ぎた15mを懸垂下降する。ブッシュに入り100mトラバース、さらに50mの懸垂下降で大窪沢出合に降りる。喉が渴いていた我々は腹がガボガボするほど水を飲む。夫婦滝の方を見ると、後続パーティはまだ登攀中であつた。中居トップで7m泳ぎ左岸から5mの懸垂。その後、古山が2回泳ぎ、大岩にはい上がる。目の前には5mCS滝がたちふさがっている。これを過ぎれば4合目まで何もないはずだ。古山が泳いで取付くが登れないという。そうこうしているうち激しい雷雨となり、大岩の上の台地に避難する。すると、たちまち濁流となって押し寄せ水位が70cmも上がる。後続パーティはどうしたろうかと話をしていたら、なんと登って来たのである。小降りになったから良かったようなものの、あのまま降っていたらどうなっていたか？我々は着の身着のままのビバークになる。彼らもここでビバークすることになった。話してみると東京YCCの2人（カサイさん、ドウケさん）で、2週間前にも来たが、取水口から最初の2m滝が登れず敗退したので、今日再び登りに来たと言っていた。

31日。明るくなると同時に出発。5mCS滝は、古山が10m泳いで左のチムニーに取付くもスリッパしてザンブリコ。本図にバトンタッチする。取付いでみると、なるほど取付きがハングしているうえツルツルだ。ちょうどいいリスがあり、ハーケンを打とうとしたらハンマーがない。ビバーク地に忘れたのだ。こうなったらしょうがない。このまま登るだけだ。バックアンドニーとかバックアンドフットなんてものではない。バックアンド腹である。全身の摩擦をきかせ登り切る。古山にハンマーの回収を依頼し、ザックピストンで上げるも、2人とも登っているという格好ではなく、ただ這いつくばってザイルに引っ張り上げられているだけといった、とても見てはいられない恥ずかしい格好でした。それを見ていたYCCパーティもきっと笑っていたでしょう（本当のことを言うと、ビバーク台地からこのチムニーは見えない）。後は4合目までは河原を歩くだけだった。予定では上部の偵察もするはずだったが、昨夜の

ビパークは、ほとんど寝ていないので帰ることにする。あまりの暑さに取水口で水泳大会をしてデボ地に向かった。デボ地に着いてビックリしたことに、こちらもかなりの増水だったようで、焚火の跡形もなく、荷物を高い所に置いていって本当に良かったと胸をなでおろした。

9月1日。今日は登山口の駐車場まで車で入ってしまう。天気予報ではあまり良くないことを言っていたが、空模様がそれを裏付けているようだ。不動の滝下は地形が変わってしまい、この前ビパークした場所はもうできない。取水口も埋まってしまい水泳大会などはできない。4合目で遡行準備をしてもイマイチ気がのらないのは天気のせいだ。でも、いつまでもいるわけにはいかないので出発することにする。1つひとつ支流を確認しながら進む。悪い所はない。石橋は自然に出来た石の橋で、よくもまあこんなに出来たもんだと自然の不思議を感じる。東ノ沢出合手前の本流最大の釜は、左岸をへつり小さく巻く。本谷沢は滝となって左岸から流入、本谷も滝になっているので、まあまあ迫力？である。いよいよゴルジュの始まりだ。雨がパラパラと降り出す。まったく、やんになってしまうよほんとに。2、3の淵を泳いで通過すると、ここのゴルジュ最後の5m滝だ。直登できず右岸を巻いていると激しい雨になる。良いビパーク適地があったので、増水した場合ここでビパークしようと、とりあえず小休止とする。小降りになったので、行動再開すると岩小舎はすぐだった。この岩小舎は人間が泊まることはできず、左岸台地にビパーク地を求める。今回の山行で、のこぎりを持ってくるかこないか迷った。登攀用具がたくさんあるのでワイヤーソーを持ってきたが、これが案外すぐれものであった。古山の右足溪流シューズが破損したので応急処置を行う。この溪流シューズは、さかいやスポーツの因縁つきの物で、私も昨年、黒部上の廊下でひどい目にあっている。出発前に古山から相談を受けたが、新品同様だし改良したようだから大丈夫だろうと答えておいたがとんでもない代物だ。あんな欠陥商品は販売を中止すべきだ。コンロでクギを焼き、ソールに穴をあけ、シュリングで縛るという処置に二時間を要した。雨が上がったので上部のルート工作にかける。第1の45m長瀬は30m泳いで右岸のバンドから懸垂するルートがあるが、正面突破を試みる。古山が泳いで取付こうとするが雨で増水してるためか1m滝で追い返される。交代し本図がアタック、苦闘の末、人間ブリッジで登りきる。第2の50m長瀬はドン詰まりに5m滝が激しく落下している。相変わらず雨が降ったり止んだりしている。古山が40m泳ぎ、右岸にハーケンを打ちピッチを切る。ゴルジュ幅は2m位か。今度は本図トップで左岸のシュリングに飛びつき、人工で登る。ハーケン6本、ボルト1本、安全環付ビナが残置されていた。あまりきいていない物もあり、

ハーケン2本を打ち加え落口に抜ける。滝上のゴルジュはフラスコ状を呈し、激しく屈曲しているため、この先は見えない。私は、この先数十mの間を突破した記録をまだ目にしていない。このゴルジュを突破しようと、ボルト、ハーケンはもちろん、フレンズ、ユマール、浮輪、果ては自作した岩に引っかけるフックまで持ってきた。寒さに強い変体（変態）古山も水に浸かりっぱなしで震えが止まらず、顔色がない。本日は時間切れのためビバーク地に戻る。

2日。昨夜はずっと雨が降っていた。天気悪く出発が遅れる。第1長瀬は問題なく通過。第2長瀬を1ピッチ泳いだところで、また激しい雨となる。増水が早く、ゴルジュ内では恐い。鉄砲水が来ないうちに逃げ出す。少し様子をみていたが、雨は増すますます強くなり、周りの壁は滝と化し、水は泡立ち、みるみるうちに水位が上がってくる。やむを得ず左岸のガリーを登り下カケズ沢出合まで高巻くことにした。プッシュに入るまで1ピッチザイルを使う。この高巻は約2時間かかった。ビバーク地を整地していると天気が回復してきたので、本日、高巻いた部分を登りにでかける。今度は右岸のプッシュ帯を下降し、第2長瀬の40m位上部の2m2段斜瀑上に下り立つ。残念ながらゴルジュが深すぎて、この下は見えない。いつ又雨が降ってくるかもしれないので直ちに遡行開始する。左に直角にまがった淵を泳ぐと、激しく屈曲した1m幅ゴルジュの急流でバックアンドニーで通過。その上が以前記録で読んだ事のある、左岸から流入する滝の水が右岸にぶつかり、跳ね返って、又、左岸にぶつかっていて圧巻という所であった。その上の滝は1m位だが、なかなかの難物。トップはショルダーで越してもセカンドを引っ張り上げることができない。しかたなくセカンドはハーケンを打ちアブミで登る。5m2条滝は右壁のバンドをトラバース、その上を1回泳ぐと最後の8m滝だった。青空も見えてきたし、遡行開始してから1時間もかかっていないので、再度下降し第2長瀬まで行ってみようということになる。泳ぎ下ること10分で遡行開始地点に戻る。2m2段斜瀑の中段の水流中に直径30cmの穴があり、股まで足を入れてみたが底には届かないという不思議な穴であった。20mほど泳ぎ下ると8mのハングした滝にでる。この下は左岸はハングし、屈曲した井戸底のような幅1m弱のゴルジュの下に1m滝と流木の滝がみえる。どうやらその下が第2長瀬の5m滝らしい。ここを下ってもユマールを持っているので戻ることはできる。しかし、時間がかかりそうなので再度雨が降ってきたら脱出する余裕はない。残念だがここまでとする。再び登り返すとビバーク地まで30分とかからなかった。今日の行動で、古山の左足渓流シューズも破損する。なんてこった。こうなると呆れて腹も立たなくなってくる。ああやっぱりか位の程度だ。もし、これが原因で敗退した

ら、交通費、日当はもちろん、慰謝料まで請求してやるぞ。ちなみに私の靴はゴローの物で、そういう不安は全然感じない。

3日。やっと晴れた。これなら思い切ってゴルジュにアタックできる。沖の沢出合下の3m斜瀑は、釜から這い上がるのに意外と手間をくい、ザックピストンで15分もかかった。沖の沢を過ぎると、登れないという問題の2mハング滝である。これが登れなければ、沖の沢から上カケズ沢まで大高巻きをしなければならない。一見直登不可能のようであるが、古山が落ち込みまで泳いでルートを探すか、だめだと言う。今度は本図が行く。しつこくルートを探しているうち、ルートがひらめいた。ハング

下のチョックストーンにシュリングをひっかけ、体を固定し、苦しい姿勢でボルトを1本打つ。アブミにのって、さらにハーケン1本を打って、これを登りきる。天気が良いとじっくりルートを探す余裕もあるのだ。その上の8mCS滝は、泳いで滝の裏に回り込み、古山がショルダー、残置ボルトで登るが、その上は岩がもろくボルトも抜けてしまっているとの事。本図に交代し、残置シュリングを使ってランナーをとり、ボルトを1本打つが岩がボロボロでまったくきかない。手で引っばると抜けてしまう。だま



沖の沢出合上の8mCS滝

しだましアブミをセットしてこれに乗り、ハーケン1本を打ち加えて乗り越す。上には下降に使ったと思われる比較的新しいボルトが残置されていた。上部ゴルジュ全体にいえることだが、この辺のゴルジュはまったく井戸底にいる感じで暗い。下部ゴル

ジュの明るさとは対照的である。1回の泳ぎと、2～3の小滝を過ぎると、ヤブが下りてきて気分的には楽になる。5mハング滝は登れず、左岸のブッシュから簡単に巻く。上カケズ沢出合までは問題となる所はなかった。ここで渓流シューズの応急処置に時間がかかる。この上のゴルジュを泳ぐと幅が極端に狭くなり50cmしかない。人間がやっと通れる程度で、ザックを背負ったまま振り返ることはできない。もし小錦が来たら（そんなことは絶対ないが）人間チョックストーンになり、2度と土俵には上がれないだろう。この先も滝は小さいが、全部泳いで取り付かなければならないの

で1つひとつ丹念に越して行く。トップの古山は素晴らしいリードで私を引っ張り上げてくれる。最近急成長の我が会のホープである。途中5mCS滝の残置ボルトは手でさわっただけで抜けてしまった。2mCS滝をハーケンとフレンズの人工で登ると沢は明るく開け、開放的気分になった。この気分が良くて沢登りがやめられないのだ。難しくはない、とはいっても易しくはない滝をいくつか過ぎると永松沢出合だ。小休止。左が本谷だが、沢の規模からいっても永松沢が本流といって



間違いないだろう。この
上カケズ沢出合上の50cm幅のゴルジュ
先はトコトコと簡単に行けると思っていたが、大まちがいだ。7m滝を右岸から巻くが、ブッシュに入るまでが意外と悪くザイルを使用する。逆層でボロボロ、トップの古山に途中のブッシュにランナーを取るよう指示する。そこから2mも上がったろうか。ホールドがはがれ4～5m滑落するもケガはなし。ランナーを取って本当に

よかった。この登りは重荷の我々にはちょっと堪える登りであった。続いて同じような高巻をしたが、ボロボロだったものの、先程みたいに悪くはなかった。その他も安全を期して3カ所ほどザイルを使った。12m2段は下段を右壁から登り、上段は左手を小さく巻く。2俣で再び溪流シューズを修理し左俣に入る。傾斜が増し高度を稼ぐ。疲れた体にはとてもつらい登りだった。100mスラブを右に行ったり左に行ったりルートファインディングしながら慎重に登る。傾斜も結構ありスリップすると下まで止まらないだろう。永松山に直接登らず左の稜線にでる。ありゃ道がない！稜線にいれば道があると信じて疑わなかったがないのだ。かすかな踏跡頼りにヤブコギを続ける。真っ暗になったら踏跡を追うのはまず無理だ。しかし、牛ヶ岳の登りで暗くなり、ヘッドランプを出す。2人とも黙ってただ黙々と歩くだけだ。古山がビパークしたいらしく声をかけてきた。「小屋まで行くんですか」、私「こんな水のない所でビパークできねーから小屋まで行くぞ」、古山「小屋には水場があるんですか」、私「あるかねーかわかんねえ」、古山「それじゃここでビパークしても同じなんじゃないですか」、私「ないとわかっているならそうだが、あるかないかわかんねーんだから行くぞ」、古山「そうですか」。又、黙々と歩く。牛ヶ岳山頂でやっとヤブから解放された。地図と磁石で方向確認をする。巻機山から左下に小屋の明かりが見え、誰かいるようだ。ずっと歩き続けているのに寒い。やっと巻機山避難小屋に着く。小屋は広く立派なもので、すでに3パーティが入っていた。水をくみ、着替えるが芯まで冷えた体は震えが止まらない。熱いコーヒーを飲んだら落ち着いてきた。すると1人の登山者が飛び込んできた。「すみません、仲間が7合目でバテちゃって動けないんです。多分、食べれば元気がでると思うんです。食料を分けてもらえませんか」。分けてくれと言われても我々にもない。なにしろ俺達だってこの3日間、ろくなもの食べていないのだ。本当は俺達が貰いたい位だ。しかし、人命にかかわると聞いては何とかしなくては。明日の行動食のチョコフレークを差し出す。そのほか清水の民宿にあずけるという約束のもとにツエルトも貸してあげる。この登山者は、ほかのパーティにも分けて貰ったが、自分も相当お腹がへっているようで、自分でムシャムシャ食べていて、この調子では仲間を持っていく分がなくなってしまうのでは、と思えるほどえらい勢いで食べていた。この夜は寒くて眠れなかった。なにしろ冬でもテントの外で寝る古山が眠れなかったというのだから俺に眠れるわけがない。

4日。ゆっくり小屋を出発、快晴の空の下、充実した気分ですっきり下りる。振り返ると巻機山が「おつかれさまでした」と声をかけているようだ。あの、たおやかな峰の裏に、どうしてあんな陰谷があるんだろう。こころよい疲れを全身に感じながら

清水部落に下りる。昨日の登山者の仲間は、食べたら元気がでたそうで昨夜下りたとのこと。ツエルトを返してもらふ。ビールで下山祝いをし、タクシーで五十沢キャンプ場に向かった。

7月29日五十沢キャンプ場(7:08)－割石沢出合(8:54)－大ビト沢出合(9:36~9:53)
－不動の滝下(10:29~11:23)－取水口でルート工作(15:38~16:43)－不動の滝下(16:59)

7月30日不動の滝下(6:37)－取水口(6:53)－大窪沢出合(14:45~15:04)－5mチョックストーン滝下ビパーク(15:40)

7月31日ビパーク地(5:20)－4号目下り舟(6:21~6:50)－取水口(7:59~8:10)－不動の滝下(8:24~10:11)－キャンプ場(11:38)

9月1日登山口(6:43)－不動の滝下(7:32)－4合目(8:46~9:29)－石橋(10:23)－本谷沢出合(11:39)－岩小屋前(12:47~15:09)－ルート工作

9月2日岩小屋前(8:52)－下カケズ沢出合(11:19~12:38)－右岸のブッシュ帯から沢に下降(13:25)－ゴルジュ内を登下降し、又登る－
下カケズ沢出合(15:02)

9月3日下カケズ沢出合(6:40)－沖の沢出合(6:59)－上カケズ沢出合(9:16~9:45)
－永松沢出合(11:29~11:46)－2俣(14:15~14:56)－稜線(16:40)－永松山(17:01)－牛が岳(19:21)－巻機山避難小屋(20:20)

9月4日巻機山避難小屋(8:30)－清水集落(11:20)

(本図 記)

最後に、この記録が山溪11月号に掲載された。その記録と一緒に遡行図が書かれていたが、あの遡行図は私が書いたものではなく、“関東周辺の沢”からのコピーと思われる図に少し付記してあるようだ。その付記がまちがっているので、記述と遡行図が一致しない。あれを読んだ読者は混乱すると思う。編集者が紙面の都合上、そうせざるをえなかったのだろうが、それならそうで私に一言連絡してくれば、それに合った遡行図に書き直せたかもしれないのに、残念におもわれてしかたがない。

その後、山溪編集部は滝沢氏に電話を入れ、12月号に訂正文を載せることで話が決まった。12月号242ページに出ることは出た。確かに出た。しかし、とても納得は行かない。あの遡行図が間違っていると言う記述はどこにもない。今、私はあの遡行図を参考に入谷する人がいたら、かなり混乱するのではないか心配している。山溪の編集部には、山にはまったくの素人がいるのか？…。

五十沢での出来事

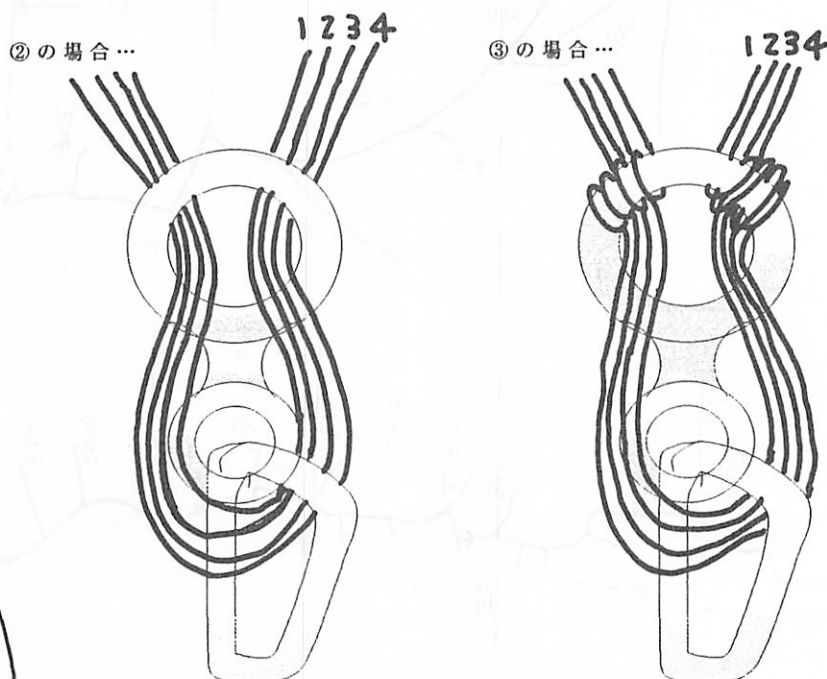
五十沢で次のような事があったので報告しておきます。そこは5mの懸垂下降だった。8mmのザイルを使用していたのと、高さがなかったので回収を楽にするため、ダブル（つまり4本）で下降し始めた。

すると岩に擦れた様子もないのにタイオフしてしまった（8環使用）。なぜかわからないまま、それをなおし再び下降し始めた。今度はハングで空懸（宙吊）になったところで、又タイオフしてしまったのである。上からは滝の水が落ちて体にまともにあたって息もつけない。窒息してしまうと思ったが、ハングの下（滝の裏）に顔を出すことができたので辛うじて息をすることができた。幸いユマールを持っていたので、脱出することもできた。後日、自分なりに考察、実験してみた。すると次のような事がわかった。ザイルを4本にすると、荷重が4本均等にかからず、どうしても1～2本に緩みが生じてしまう。するとそれが原因で、いとも簡単にタイオフしてしまうのだ。

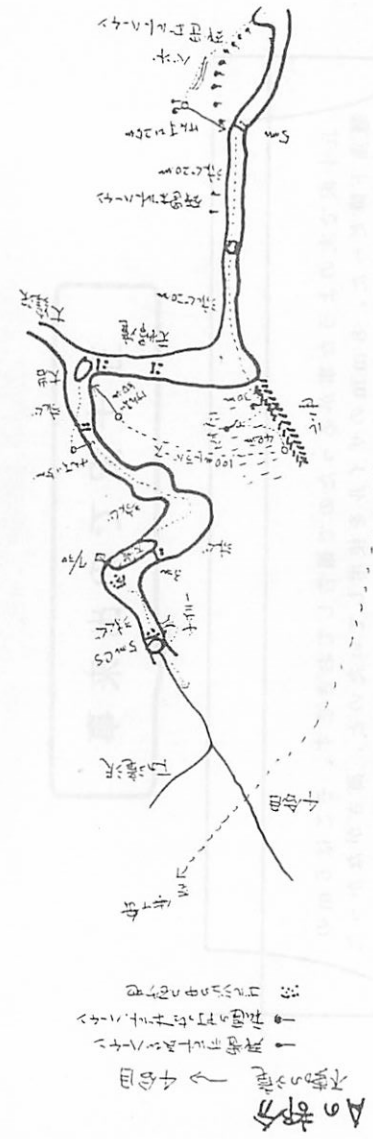
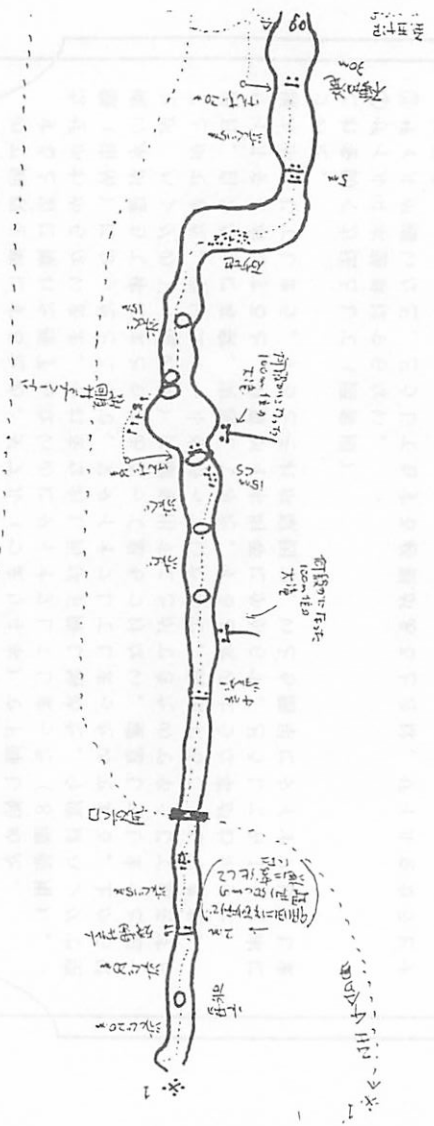
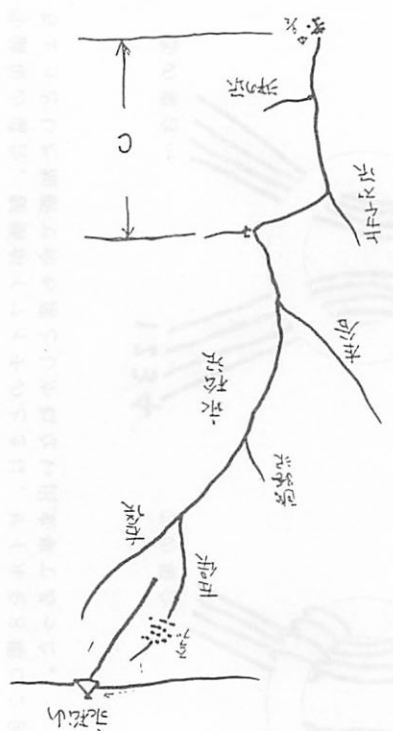
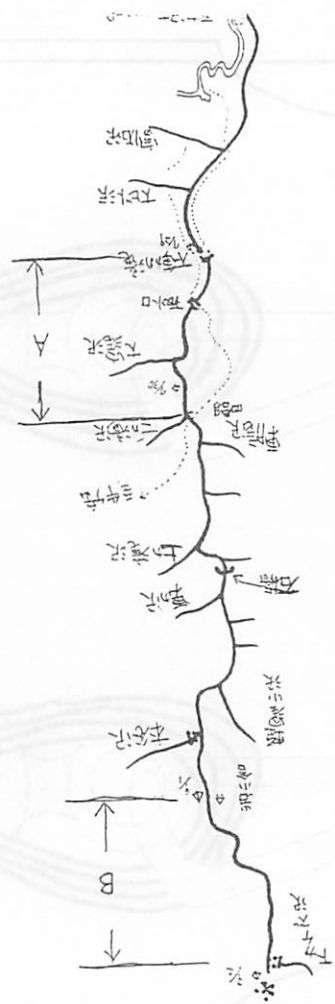
これを防ぐ方法として（図参照）

- ①ザイル4本懸垂はやらない。
 - ②ザイルが細いなど、どうしてもする必要があるときは、ザイルをカラビナに通す。
 - ③前項の場合、制動がイマイチのときは、ザイルを8環に2回巻く。
- ちょっとした油断で命も落としかねない出来事であった。

（本図）

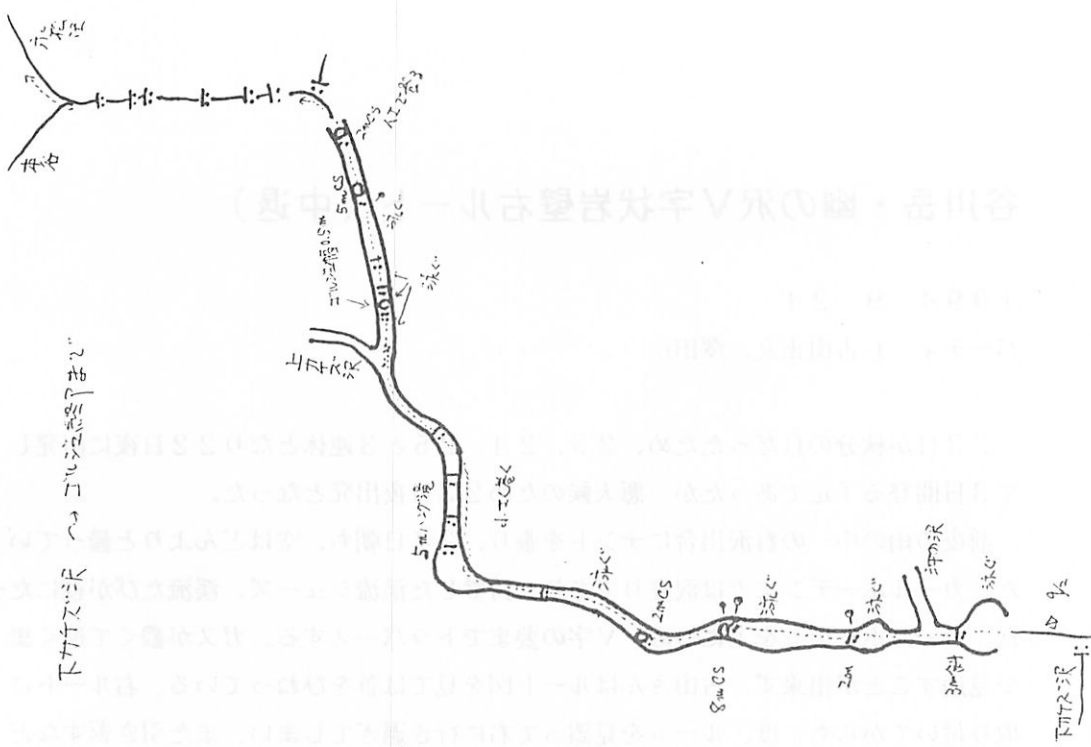


五十沢川本流 通河図 A.B.C.の境に即す





Bの部分
岩崎 → 下ササズ沢



Cの部分
下ササズ沢 → コロササズ沢

谷川岳・幽の沢V字状岩壁右ルート（中退）

1994. 9. 24

パーティ L古山正文、澤田仁

23日が秋分の日だったため、23、24、25と3連休となり22日夜に出発して3日間登る予定であったが、悪天候のため23日夜出発となった。

前夜の雨の中一の倉沢出合にテントを張り、24日朝も、空はどんよりと曇っていた。カールボーデンまでは沢登りであり、持参した溪流シューズ、溪流たびが役にたった。カールボーデンを上につめ、V字の要までトラバースする。ガスが濃くて遠くまで見通すことが出来ず、古山さんはルート図を見ては首をひねっている。右ルートに取り付いてからも一度、ルートを見誤って右に行き過ぎてしまい、また引き返すなどしていた。岩登り一年生の自分は、トップの古山さんを確保しつつ、ルートファインディングの難しさとトップの苦労を痛感した。最後2ピッチというところでルートが解からずに行き詰まってしまった。古山さんは一時間も草付きと格闘していたが、14:00を過ぎてしまった事と雨が降ってきたことで、引き返すことになった。急いできたルートを下降していったが、沢の途中で日が暮れてしまった。暗闇の中、懸垂下降をしたのは自分にとって初めての体験だった。

テントに戻ったのが19:30であった。次の日は雨のため中止、湯テルメに入ってから帰途に着いた。

（澤田 記）



唐沢岳幕岩山嶺第1ルート（中退）

1994. 9. 23～25

パーティ L 武藤泰宏、根本憲泰（水戸葵山岳会）、本図一統

集会で昨年、中退した中岩沢に行こうとパートナーを募ったが、寒いとか、沢より岩に行きたいとの理由から誰も乗ってくる人がなくアブレてしまった。皆は何パーティかに分かれて谷川岳に行くという。当然私も岩登りは好きなのだが、今頃の一ノ倉沢は50m下降があるので、それが面倒くさく嫌なのだ。水戸葵山岳会の武藤氏に電話をしてみると、同じ日程で山形の山寺にフリークライミングに行くことになっているから一緒に行かないかと誘われる。でも今度の連休はどこかの山に行きたかったのでお断りした。次の日、武藤氏から電話があり、私に付き合ってくれるという。行く所は以前から話にでていた唐沢岳幕岩になった。幕岩は私は行ったことがないが武藤氏は4～5回行ったことがあるという。武藤氏に何か無理を言ってしまったようで悪い気がした。さらに根本氏も同行することになった。

22日。下館に20時半に集合して大町に向かった。七倉に着くとひどい雨で、明日はだめだろうとゆっくり寝る。

23日。目が覚めると晴れているではないか。タクシーの運ちゃんが寄ってきて、すぐ行くのかと言う。ここからはタクシーで行くのが当然らしい。もっとも自分達もタクシーで行くつもりではいたが。運ちゃんの話では、すでに本日8人が幕岩に向かったという。タクシーで高瀬ダム下まで行き唐沢を登る。金時の滝を左のルンゼから固定ロープ頼りに80m登った以外、ベースまでは簡単だった。大町の宿はすでに一杯。神奈川の宿は空いていたが水がなく、静岡の宿に天幕を張る。ここはちょっと湿っぽいが、雨が降っても濡れず、実に快適な幕营地だ。さて壁はというと、水がザーザーと流れ、滝になっていて登れる状態ではない。幕岩の上にはルンゼが何本もあり、そこから流れてくるので、雨が止んでも1日位は水が流れているのだ。この日は広島ルートのハングにロープをフックスしたパーティと畠山ルートで2ピッチ位登って遊んでいたパーティ以外取付いた者はいなかった。時間があるので、きのこ採りにかける。スギヒラタケが大量に採れた。ナラタケもすこしあった。わきを通った他のパーティにも分けてあげた。食事の用意は全部2人がやってくれて、武藤氏、根本氏には申し訳なかった。というよりも何を手伝ったらよいかわからず、ただボーッと見ているだけだったのだ。私のしたことは焚火の準備だけで、お二人には感謝している。

24日。4時半に起きると雨が降ってきた。20分位で止んだがせっかく乾いた壁が濡れてしまった。他のパーティも様子をみていたようだが、遅くなって畠山ルートと広島ルートに2パーティが取付く。我々も遅い食事をして取付くことにする。時間的にいって完登は無理だろうから中央バンドまでといったところだろう。山嶺第1ルートに武藤氏リードで取付く。前傾フェースから人工とフリーのミックスでけっこう悪い。人工も、くせのある人工でピンもやたら遠い。20mでピッチをきる。他のルートは乾いてきているのに、このルートは水がたれてビショビショだ。いつも濡れていることが多いらしく、ヌルというかコケというか、そんなものが生えていて、とにかくヌルヌルなのだ。溪流シューズがほしい位だ。2ピッチ目は左トラバース後直上だが、フリクションがきかずハーケンを打つ。最後は木にぶら下がるという、まるで猿である。ルート解説に書いてあったが、確かにこのルートは玄人好みのするルートで、経験の浅い者が登攀するのはしんどいかも知れない。かなり壁のコンディションが悪く、私は下りてもかまわない旨、武藤氏に声をかける。武藤氏はもう1ピッチ登ってみると言って、さらに登っていった。小ハングを越した上も相変わらずのヌルヌルビショビショで、相談の結果、下りることにする。懸垂すると取付きまで50mいっぱいであった。武藤氏はルート選定を誤ったと、だいぶくやしがっていたが、私は、よくあそこまでこのコンディションの中登ったと思う。さすがである。壁が乾いている時にもう一度アタックしたいものだ。登攀用具を片付けていると、今から京都ルートのハングを登るというパーティに会う。ベースに戻ると雨が降ってきた。ちょうどいいタイミングで下りたようだ。かの京都ルートに取付いたパーティはトップがハングを抜けた時すでに真っ暗、セカンドは登れずカラビナ等残置してきたという。次の日、10月の連休にでも回収しに来ようかなと、うらめしそうに壁を眺めていた。今日完登したのは昨日フィックスした広島ルートと大凹角のパーティだけだろう。この夜は雨も本降りになり、壁はまた滝と化した。

25日。天気は回復傾向だが壁は滝。ゆっくり下山する。葛温泉に寄り汗を流して帰路についた。

今回の山行で武藤氏、根本氏にはたいへんお世話になり、こころより感謝しております。来年は私が、ぜひどこかにご招待したいと考えております。

(本図 記)

追伸 コースタイムはとってありません。写真も、沢登りでなかったので防水カメラではない普通のカメラを持っていったため、あのビショビショヌルヌルのなかで引っぱり出すことができず、一枚もありません。あしからず。

《友好山岳団体の月報、会報、その他紹介》

ありがとうございました

—— 月報 ——

◎Rohman NO. 111 1994. 7 B5 46P 浦和浪漫山岳会

春の集中 黒岩山・黒沢・トウガン沢・黒岩山、門石沢・引馬峠・黒岩山、赤岩沢・片品川・猿沢・ブナ沢・黒岩山、魚沢・実川・硫黄沢・大真沢・黒岩山ほか

◎Rohman NO. 112. 1994. 8 B5 48P 浦和浪漫山岳会

夏合宿 川内 杉川・大底川を探索 大底川本流ム沢・コザマタ沢、銀次郎沢、切松沢・コザマタ沢、七郎平沢左俣・コザマタ沢、赤花沢・レンゼ左俣、岩宿沢・赤花沢、ハンタン沢ほか

◎Rohman NO. 113. 1994. 9 B5 32P 浦和浪漫山岳会

南会津小戸沢西ノ沢高倉沢・姥ヶ懐・藤倉沢右岸尾根・白戸沢洗戸沢・洗戸沢左岸支流・会津朝日岳、実川・硫黄沢、巻機山五十沢本流 中部ゴルジュ帯ほか

◎月報・ZAC NO. 155 1994. 7 B5 12P グループ・ゼフィルス

遭難誤認事件について、大黒茂谷ほか

◎月報・ZAC NO. 156 1994. 8 B5 28P グループ・ゼフィルス

あだたら山・杉田川、裏岩手・安栖沢・策森、白神山地・追良瀬川、奥多摩・大雲取谷、裏妙義・仲木沢烏帽子沢、谷川・赤谷川本谷ほか

◎わらじ NO. 460 1994. 7 B5 18P わらじの仲間

春の集中山行 笛吹川東沢鶏冠谷右俣・ヌク沢左俣右沢、股ノ沢、東のナメ沢、入川真ノ沢ほか

◎わらじ NO. 461 1994. 8 B5 18P わらじの仲間

救急パックのこと、山岳保険てな一に、中国青海省・玉虚峰に登って、谷川岳幽ノ沢中央ルンゼ、池郷川下部ゴルジュの上半分ほか

◎わらじ NO. 462 1994. 9 B5 18P わらじの仲間

飯豊夏山合宿報告 頼母木川・上ノ小俣沢、実川・前川ビンカガクチ沢、胎内川作四郎沢、北股川鮎倉沢、ムスターグ・アタ登頂報告ほか

◎逍遙 NO. 38 1994. 7 B5 8P 逍遙溪稜会

南ア・野呂川支流アカヌケ沢、春の集中山行 阿武隈川支流里滝沢、阿武隈川支流南沢、阿武隈川支流白水沢左俣右沢・白水沢右股、阿武隈川支流白水沢左俣左沢・大白森沢ほか

◎逍遙 NO. 39 1994. 8 B5 12P 逍遙溪稜会

巻機山・登川姥沢川南ノ入沢、奥多摩・南秋川軍刀利沢、足尾・小中川本谷、苗場・清津川釜川右俣、徒渉訓練の足尾・庚申川ほか

◎逍遙 NO. 40 1994. 9 B5 10P 逍遙溪稜会

谷川周辺・宝川ナルミズ沢、足拍子川本谷、朝日・見附川トウヌシ沢左俣左沢ほか

◎山紫水明 NO. 2 1994. 6 B5 8P 山旅の会

旅の始めに、栃木県人の独り言、白神岳、谷川岳東尾根ほか

◎山紫水明 NO. 3 1994. 7 B5 4P 山旅の会

在来岩魚よ永久に、遡行時に於ける滝の高度計算法ほか

◎山紫水明 NO. 4 1994. 8 B5 12P 山旅の会

続在来岩魚よ永久に、青鹿岳、只見叶津川(山菜ハイク) 太平山・小阿仁川大旭又沢、大深沢跡

◎山紫水明 NO. 5 1994. 9 B5 8P 山旅の会

山旅の会ってどんな会、白神山地・追良瀬川、冬山を目前にしてほか

◎峻嶺 NO. 5 1994. 8 B5 13P 遡行クラブ神奈川

奥秩父・白泰山集中 中津川大滑沢、中津川小若沢、中津川小滑沢、丹沢・小川谷廊下、シダンゴ山、水無川本谷～セドの沢左俣、新人紹介ほか

◎峻嶺 NO. 6 1994. 9 B5 11P 遡行クラブ神奈川

一周年を迎えて、飯豊連峰・大石川東俣沢、北ア・表銀座縦走、丹沢・本谷川四丁四反ノ沢、本谷川三角ノ沢、清津川サゴイ沢ほか

会報、その他

◎溪のネットワーク通信 1994. 9. B5 4P 溪のネットワーク

今年のブナ集会は11月5~6日神奈川県厚木で開催されます、鳴瀬川源流のブナの森は白神山地以上の素晴らしさだった。伐採中止のハガキを出してください！
白神・赤石川のゴミ撤去にご協力を！ほか

◎カネディアンロッキーズ茨岳連中高年海外登山研修 登山報告書 19947~8 B5 37P
茨城県山岳連盟

1994年7月20日から8月8日にかけて茨城県山岳連盟主催による中高年海外登山が行われたが、これはその報告書である、Mt. ストローム、Mt. テンプル、フェアビューマウンテンなどに登頂した。

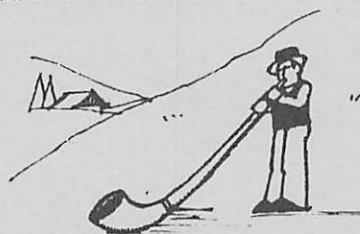
以上、閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

編集の仕事を請け負ってから早いもので、一年立ちました。

前回自分が、世代交代かなあ～と感じると思っていたら、突然（いずれはという事は感じていたけど）我が会のチーフリーダーの高田氏が、家の都合で実家（山口県）に帰らなければならなくなりました。またまた淋しくなります。今振り返ってみると、彼の偉大さというか人格が、今現在のACC-J茨城を創ってきたのだと私は信じています。高田君、今まで本当に有り難うございました。そして新たな船出をする君に会を代表してエールを送りたいと思います。『高田！頑張れよ～。いつまでも俺等は君の素晴らしさ、君の器の大きさをを忘れない～！そして又何処かの山で会おうぜ。』

これからもこんな形の別れは有ると思います。この文集も会の為というよりは各々の個人の歴史になりますから、誰とは言いませんが、締め切りは、必ず守るように！……某Fさん。ともかく何とか文集も本格的なものになってきたなあ～と感じる今日この頃です。これも前編集長のアドバイス並びに協力があればこそです。（協力と言うより脅迫に近いけどネ…ああ～聞こえました。嘘ですヨ、心から感謝してますってば…）



（生井一男 記）

季報[R&V] 第14号 発行1994年 夏号

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城 〒306-006茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者：生井一男

印刷所：やさと印刷所

